

---

# 羊の世界にとりっぷ！

さくらさくらさくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

羊の世界にとりっぷ！

### 【Nコード】

N72780

### 【作者名】

さくらさくらさくら

### 【あらすじ】

企画名【Smile Japan】少しでも皆様の笑顔のたしになれれば幸いです。

夕花さま「猫の世界にとりっぷ！」

市太郎様「狼の世界にとりっぷ！」

堅川杼緯様「豹の世界にとりっぷ！」

以上のすばらしいお話を読み、萌えてしまったさくらが送ります。  
リスペクトして、インスパイアザネクストした品がこれなんです。  
・・。世界観を壊してないことを祈ります。

羊の国からこんにちは。(前書き)

狼族、猫族、豹族ときたので、癒し系。

羊の国からこんにちは。

拝啓 お父様、お母様へ

おもえば、遠くにきてしまいました。

ご両親様とは、もう遠く、住む世界すらたがえてしまいました。  
口うるさくはあったけれど、愛してくれていたこと、心から感謝します。

ひとり、遠くはなれた身知らぬ場所で、心細くもありましたが、今は仕事もいただいて幸せに暮しています。

どうか、嘆かないでください。

いなくなってしまった貴方の娘は、今、この上なく幸せに暮しているのですから。

・・・遠く異世界の空の下で！

ただ、心残りがひとつだけ。

お父様、お母様。私の部屋の押入れの中のダンボールの中身だけは、どうかどうか、目を通さずに。

のぞいたら最後、あなたの知らない世界へご案内されちゃいます。  
その筋の友人が、弔問の際に引き取って行ってくれる手はずになっておりますから、どうか手を触れないでくださいね。

腐女子の絆は舐めたもんじゃないのです。

貴方の娘より。

\*\*\*\*\*

それはある晴れた日。

空に浮かぶ雲を見ながらのんびり歩いていた時のこと。

あ、あの雲おいしそう、などと考えていたからイケナカタノデス。

はっと思ったときは足元に大地が無かったのです・・・。

往年のマリリンが示した例のポーズを披露しつつ、落ちること約十数分。長かった。

走馬灯のように脳裏に浮かぶあれやこれ。

ばすっけつとぼーるを持った赤い髪の人が黒い髪の人とハイタッチをしたあたりで、なんか可笑しいな、と思い当たり、冷静になった私です。

しかもそのときは衝撃とともに訪れると思っていたのに・・・なんでしよう、ぽふん？　ぽわん？

綿菓子のような感触に、驚いて目を見開いてしまいました。

・・・これは、あれでしょうか。

夢ですかね。

ひとつつねって見ましょう。はい、むぎゅっ。

「・・・いたい」

どうやら夢ではなさそうです・・・。

・・・この世界は異なる種族の暮す世界であるようです。

のどかな田園風景の中、真白い毛玉の群れが。もこもこ、もふもふ。ふかふかと。

「あ、え、ちよっ・・・」

ああ、もふもふ。超気持ち良い・・・！　いや待てわたし。

なにこの、天然羊毛。ふわふわで、もこもこで至福はこのことですね！　だから待て、私。

あああん、このもふもふの海・・・！　なんかほかにコメントあるべきだろう、わたし！

・・・でも、羊さん、その洋服意味無いんじゃない？  
奇妙なことに服を着た、羊の群れがそこに存在した。

・・・稀に、人間族の落人おちひなが、落ちてくることを熟知している彼らは、落ちてくる異邦人を助けようと集まって来たのだが・・・そんなことこの娘には分からない。

彼らは、娘を歓迎するようにメエと鳴いた。

地面に降りて始めて、あー、私死につぶれたんだと思った。  
だって私を支えてくれてた大きい羊さんの頭には立派な立派な、  
角が。

それはもはや凶器。刺さってたら死んでいたに違いない。  
つくづく妙な運の良さに感心しつつ、顔を上げて背中で受け止めてくれた百パーセントワールな彼に頭を下げた。

・・・彼の瞳は温和な青色。

これが、私の御主人様との出会い。

\*\*\*\*\*

「めえちゃん、めえちゃん、お腹空いたなの」  
白くもふもふな毛玉もこもこな物体が、ころころと転が・・・ん、歩いてきてそう言った。

ああん、そうなの？　じゃ、こっちの牧草はどうかしら？　鉄分豊富な緑黄色野菜ですよー！

口直しに刺激の強い草も取り揃えておきましたよ？　甘くとろける食感の草だって用意しましたとも！

背中を駆け上る、この快感。この感覚は癖になりますね。

「めえちゃん、ここの綿毛がね、絡まっちゃって・・・」

白もこもこの中にも気品を感じさせる獣人の子供が、手を前にもじもじするけど、その手が・・・前に回そうとしてもとどかな・・・うぐっ。いかん、鼻血が・・・。

もじもじのあまり、手で毛をもてあそばすと！

あ、あ、引っ張っちゃダメ！ 私がやさしく梳いて上げるから！  
みてみてこの為にお隣のバリデス様の抜け替わりの毛をもらってきたの！ ナミちゃんに頼んだらにつこり笑顔でくれたのよ！

狼の毛で作ったブラシなんて素敵でしょう？・・・あら、やだ。大丈夫、次はホワイトタイガーも狙ってるし、豹の毛だって狙ってるわ。各種王者の毛で作られたブラシなんて、素敵でしょう？

あらあら？ いっそうお尻が引いてるわよお。

「ふふ・・・ふふふ。ふふ。ふふふふふ」

かわいいわ。そのへっぴり腰な感じ。

好いのよ好いのよ。狼は天敵なものね？ その毛だといえども畏怖の対象なのね？

うふ。うふふふふ。じゆる。

あ、いけない。つつい、よだれが。

右手で口元をぬぐいつつ、片手に掲げた狼ブラシをちらつかせながら、そ〜っと、そ〜っとおびえて縮こまる子羊たちに近寄った。

「芽衣。・・・それぐらいにしてはくれまいか・・・」

心底、・・・心底、疲れたように待ったがかかった。・・・ち。

目が半眼になっているのが分かる。でも無理。あのラブリーでキュートな中に畏怖の影が浮かぶお姿ならまだしも！

座りきったまなざしをすつと流せば、そこに佇むは、壮麗な主。

何で、人間の格好なおお・・・。

「毛づくろいと、羊毛の管理が私の仕事であると理解しておりますが、ご主人様」



羊族のすべてを統べる主さまでわたしのご主人様、ノルディさまが立っていました。

衣食住、すべてにおいてノルディ様がいなければ、保護される落人といえど、生活に苦勞するはずです。

・・・豹のご主人様、カーク様のところでリナちゃんは女主人として君臨しているけどね。

文字通り女王様だ。鞭が似合う。似合いすぎる・・・。

うなる鞭に影で女王様と崇拜されているらしいの。  
その上司で白虎のラヴィツシュ様とそのメイドで人間のリンちゃん。

リンちゃんはラヴィツシュ様の屋敷で「ちいさきもの」と呼ばれているわたしたちからすれば子猫としか思えない生き物のお世話をしてます。

他にも黒狼のバリデス様の屋敷でメイドをしている落人、ナミちゃん。今のところこの三人がこのあたりで生活している落人だそう。そんで四人目が私、岸 芽衣なのです。

芽衣と呼べないこの子達に、めえちゃんめえちゃんとどっちが羊か分からんぞーな状態のあだ名で呼ばれてます。

ただ一人、正しい発音ではつきりと名を呼んでくれるのがノルディさまです。

白銀の髪に青の柔らかい瞳の美人。

ああ、毛皮もふもふで来てくれたら、もう少し愛想も考えないでもないけど・・・。

「お言葉ですが、ご主人様。バリデス様の毛ブラシで梳いておけば、捕食対象から外れることが出来ますわ。彼らのボスがマーキングした事と同じなのですから」

「だが、そのおびえ具合、かわいそうだと思わぬか？」

その言葉には笑って力説しておいた。

「かわいいじゃないですか！」

特にこのおびえっぷりったら、イケナイ妄想に走りそうで困るくらいですわ！！

「では、その・・・私の毛づくろいも頼みたいのだが・・・」

な・ん・で・す・と！

はあはあしながら血走った目で、ノルディ様見てしまいましたよ。確実に引いた感じが漂いますが知りません！

ノルディ様が頬を染めていたよな気がしますが気のせいなのです。

「・・・それでは、あのお姿になって下さると言うことですね・

」

あの、雄雄しくも逞しいもふもふの王！

巨大な角も優美な、長毛種の鏡のような立ち姿。あの悠然とした彼を見たのは、悲しいかな、数えるほどでしかないのです。

あの憧れのもふもふの王様に、こ、このブラシを入れることが出来るなんて・・・！！！！

メイドブラボー！

異世界万歳！

来たれもふもふの神！

ノルディ様に、子羊たちががんばれー、とか、もう一声！とか発破をかけていたけれど、この際そんなものは無視！

期待に満ちたまなざしできらきらと見上げたら、ノルディ様はほんのり頬を染めて目を伏せた。

・・・まあ、ね。その後も私の仕事は、毛づくろいです。対象物件がすこし変わりましたが。

もふもふは変わらず。サイズかな、問題はー。

・・・ああ、でもさ。生殖可能だったなんてもっと早く教えてほしかったなー・・・。

いろいろあったけど、私のいまの立ち位置は。

なんでかな、ノルディ様の奥方です。

だれだよ、羊って温和で優しくて臆病だなんてイメージ刷り込んだの。

闘牛ならぬ、闘羊<sup>とつやう</sup>ってものがあるくらい、気性の激しい生き物だったなんて、もっと早く教えてくれよおおっ！

## 羊の国からこんにちわ。 2

拝啓、お父様、お母様。お元気ですか？

日々はつつがなく、過ぎております。

見渡す限り、白く、ところにより茶色のふわふわもこもこの海です。

細く高く響くいななきは、魅惑の旋律です。

わたくし、人生を謳歌していますわ！ 日々、にまにまが治まらないのです。

白いそれに癒されながら毎日、仕事にせいを出しております。

はるか異世界にいらっしゃる、お父様、お母様。

・・・芽衣は元気です。

\*\*\*\*\*

「めえちゃん、めえちゃん、この草おいしいね」

もっしやもっしや、草を食べながら可愛いあの子がにこ〜とわらう。

・・・はあん、その緊張感のなさ、ナイスだわ！ 張り詰めた緊張の糸をぶった切る、その微笑み爆弾！ あああん、至福！

運んできた甲斐があったよ！ 死ぬかと思う登山道だったけどね！  
愛だけで人跡未踏の山地を乗り越えることが出来るって、始めて

知ったよ！

肩に食い込んだリュックの紐の痛みだって耐えられるってモンよ！

手に持ったブラシを握りつづす勢いで、激しく身をくねらせるわたし、あら、ヘンタイではありませんよ。

わたくし、岸 芽衣は落人<sup>おちゆうじん</sup>と言いまして、時折異界から落ちてくる人間なのです。

そう、・・・人。

この世界には「獣」と、獣から人へ変化できる「上位種」と言う力ある者の二通り、存在します。

「人」は落人しかいません。

人型から変化する事のないやわな皮膚、やわな爪しかなく。やわな牙すらない私たちは、この世界にとって異種族なのです。

そんな落人を保護することが「上位種」には義務付けられている  
そうで・・・。

私の保護者で、お仕事を下さったご主人様は、羊族の「上位種」、煌く白銀の雄雄しい羊、ノルディ様です。

早いものでこの世界に落ちこちて、もう一年が経ちます。

最近の私の仕事も板に付き、可愛いもふもふパライスの中、日々楽しく暮らしていたんですが・・・。

このほんわりと、温かな笑顔。この笑顔こそ、羊ちゃんのステイタス！

キングオブ癒し。いや諸説ありますよ？ 特に猫のにくきうは侮れないと思うのです！

特にこの登山の折によった猫の国。

落人のりんちゃんが抱いてたミルティちゃんの、目玉つぶす勢いの愛らしさとか、途中の狼属国犬領で出会った、ななちゃんのそばにいたボルゾイとかね？

アレよね、ナルトに対するサスケみたいなの？（あら、ダメかしら？）

ぶらつくな執事様とカワイイ眼帯のあの子みたいなの？（これもダメかしら？）

猫族と犬族の言葉に言い表せないかわいらしさ、愛おしさを眼にすれば、癒しとは何ぞや？ と考え込んでしまふ次第なのです。

究極の悩みよね？

犬の尻尾か、猫の尻尾か。

犬の耳か、鼻の可愛さか。猫の耳の敏感さか。

「・・・確かに私の尻尾は短いし、耳もそう敏感ではないが・・・」

「あら、ご主人様の尻尾が必死にびるびるしている姿は、言葉に言い表せないほど愛らしいと思いますわ！」

そうよね？ 尻尾の長さ、機敏さもいいけど、必死に動かして存在をアピールしてますって雰囲気も捨てがたいわよね！ そうそう、それからそこに羊の抱き心地とぬくもりが加われば、クリティカルヒットでダメージポイントは高いのですわ！

あのふわもこな触感と、ほんわかしだ笑顔。気が抜けまくって緊張感のかけらもなし。

ああ、癒し系！

羊ってこうじゃなくちゃ！

「・・・芽衣・・・。褒めているのか、貶しているのか、紙一重だと・・・」

「まあ！ けなすだなんて、そんな！ 体全体でラブを叫んでおりますのに！」

「・・・わかった、わかった。では、そろそろ、私の話も聞いて

ほしいのだが・・・」

「仕事がありますので後に願います！」

断じて、人型だったから冷たくしたわけではないのよ。

切って捨てた後のノルディ様の、がぁぁんとした顔も、その瞬間ぴこつと出た耳も、ぴるぴる震えて・・・はうつ！ いけない、ここで情に流されては！ なぜなら私は・・・仕事中！

肩を落として去っていくノルディ様の後姿に哀愁を感じたけど、仕事中に人型で来るほうがいけないのよ！ 羊の愛らしいお姿だったなら、万に一つも休憩しようか、息抜きも必要よね、と思うかもしれないのに！

何度も、初めてお会いした日の姿にと、お願いしているのに・・・。

「それでは話が来ん」とおっしゃって、拒否されるの。

でも、羊体型になってもお話は出来るはずなのに。子羊ちゃんだって、この獣体型で言葉を話しているのにな。

「人型じゃないと話せない話って何かしら・・・？」

小首を傾げる私。それでも手は止まりませんよ！ 並んでる子羊ちゃんの毛並みに沿ってグルーミング。

あらら、キミタチ、今日はどこで遊んできたのー？ 小枝や葉っぱが一杯絡まつてるわ。

優しく丁寧に、ごみを取り、梳り、艶を出す。ああ、いいわ。いいわあ、この手触り・・・！

ふわふわの、もっこもっこ・・・！

だんだんと眼が血走っている気がしたわ。引かないでね、子羊ちゃん。あ、慣れたって？・・・うん、それもどうかと思うわよ・・・でも、私以外の誰かに触らせちゃダメだからね？

「おささま、きゅうこんまた失敗したんだね」

「球根？ はっ！ 新しい食感の新しい草ね！」

「めえちゃん、そうじゃなくてね・・・」

「新しい草の開発も、がんばってるのよ！　またあの山越えて、草を運んでくるからね！」

びしつと指差すは遙か彼方に聳える断崖。

そこに魅惑の味わいの牧草があると聞いたら、取りに行かずにいられましようか！

「めえちゃん、命かけてるね・・・」

「当然よ！」

ノルディ様の采配に感謝して仕事をこなし、百二十パーセントの満足を子羊たちにしてもらうのが、私の使命。

それこそが、私を拾って、保護してくれて、あまつさえ、仕事の幹旋までしてくれたノルディ様への、ご恩返しなんだから！

どんなに苦しい道のりだって耐えて見せるわ！

ほら、ブラッシングを待って並んでいるこの子羊ちゃんたちを見れば、癒されるってもんよ。

可愛いじゃないの・・・。

「うふ。うふふ、うふふふ・・・今日はね、とっておきの、ブラシなの・・・」

この笑顔のためならば、あの山のとっぺんの、香りのいい草をまた摘んできてあげたいと思うのよ！

「めえちゃん、めえちゃん、こっちの草もおいしいね。おささまに持っていったら喜ぶよ？」

「ノルディ様は長様で、大人ですから、ご自分で行かれるでしょう」

むしろあの険しい山道だって、散歩にしかない。

悠然と佇む山の王者を想像した。ああ、格好いい。どうしてあの体型を取ってくれないのかなあ・・・。

憧れのもふもふの王。理想の体つきで理想の角なのに・・・。  
初めて異界にやってきた私を支えてくれたあの優しい瞳を、もう



一度間近で見たいだけなのに。

ノルディ様の身長は、158センチの私を超えてはるかに高いのだ。あの青い優しい眼を見るためには、羊体型になってもらっ度良いのに、さ。

半分なみだ目で可愛い羊君たちのころした体をマッサージしていた。

「め、めえちゃん、くすぐった・・・きゃん」

毛並みに沿って丁寧<sup>くしやう</sup>に、梳る。ここね？　ここが好いのね？　あ

ららあ、震えちゃって・・・ああ、いいわ。その悶え具合・・・！

「うふ…うふふ…うふ、はあはあ」

すりすり、なでなで。ああ、ふわふわ…。

「きゃあん、めえちゃんあん」

小さなふわふわ子羊が悶えのあまり、なみだ目で見上げてきた。

・・・あ、やばい。鼻の奥が痛い。一瞬どつか違う世界に飛んできたよ。・・・でもまたトリップするのはいやよ！　だってここ、天国なんだもの！

ふと見れば。

小高い丘の上にノルディ様の瘦身優美な姿があつた。遠くどこまでも望めるそこで、彼はじっとこちらを見ているようだった。

「あ、おささま」

「おささま、がんばれ」

子羊君たちは、ノルディ様に手を振って、しきりに応援しているようだ。

ノルディ様の顔に淡い微笑が浮かんだ。

ああ、ノルディ様も、子羊たちの癒しパワーをもらって元気が出たのかな？

ノルディ様が子羊たちに手を振り返した。

それに気をよくした子羊がまた手を振ろうとして・・・コロンと後ろにでんぐり返し。

・・・なんて、ツボを押し捲るの、キミたち・・・！ 危うく鼻血が出るところだったよ。

しかし・・・何に対して「がんばれ」なのかな？

羊の国からこんにちは。 2 (後書き)

嫁以前のお話でした。

### 羊の国からこんにちは。 3

目指すは絶界の、断崖の壁。

あの山の頂上に薫り高く栄養も豊富な牧草が生えていると聞いたのは、異界に落ちてまもなくの頃だった。

日々可愛い子羊たちの世話をし、癒されまくってた私。

この御礼を子羊たちにしたい。有り余る愛らしさを惜しげも振りまいてくれる君たちに御礼をしたいのよ！

おいしい草を食べて幸せそうにほんわかと笑う子羊たちが見たい！  
激しく見たい！

きつとおいしい草を食べて、初めての食感に眼をきょとんと見開いて、ぱあっと顔色がばら色になって・・・と考えたら、行かずには居られなくなりました。

行ってくる！ 誰が止めても行くからね！

みんなが身もだえしてもこもこになっちゃうくらいおいしい草を、摘んでくるからね！

でっかいリュックを背負って山道を歩くこと数時間。

足を出すのも億劫になった頃、ようやく前が開けた。

眼下に広がる大地。

あそこが狼の国かなー？ それとも猫の国かなー？ いやいや、

豹の国かもしれないし、鼠さんの国かもしれないぞ。

羊の国はどこかなーって見ていたら。

「・・・まったく、根を上げるかと思っていたのに、登りきってしまうなんて・・・」

声がした。

「ノルディ様」

背後に光を受けて佇んでいる、牡羊。

白銀の毛並みも麗しく、けれども雄雄しさは変わらない。大きな角の優美な、力溢れる生き物。私の今までの人生の中でこれほど優雅で、壮麗な獣はいない。

見つめるまなざしは青。優しい顔立ちの中に、凜とした心が通っている。獣なのに、獣ではない彼。

「さあ、暗くなる前に屋敷に帰らないと、小さき者たちが泣き出してしまふ。早く草を摘みなさい。芽衣が立っているその岩場の影に、香り草が生えている」

ノルディ様が首を揺らすと、空気までが色を変える。

切り立った山肌に、雄雄しい牡羊。彼に見守られながら、私は急いで草を摘み始めた。

草をリュックに詰め込んで、満面の笑顔で振り返ったら、ノルディ様が頬を染めて視線をはずした。

ここまで迎えに来てくれた彼に感謝したくて、でも与えられたものはすべて彼の持ち物で。

だから、今、一番艶がよくて薫り高くて、柔らかそうな草を彼の前に差し出した。

「ノルディ様、迎えに来てくれてありがとうございます、これは私の気持ちです。今日一番おいしいところですよ！」

何かをしてもらったら、何かを返すのは人間にとって基本中の基本だ。

だから、このお礼について何も深いことは考えていなかった。

眼を見開いたノルディ様が、小首をかしげて、（あああん、悩殺ポーズですね！）

「・・・受け取っても、良いのか・・・？」

と聞いてきたので、何も考えず、私はにつこり笑顔で頷きました。なぜか、頬を真っ赤に染めたノルディ様が、嬉しそうにもぐもぐしているのを、役得とばかりに堪能し、その背中の方わもこ加減を味わっていた私です。

さて帰ろうか、と思ったとき。

ノルディ様の前に一頭の牡羊が現れました。

白銀優美なノルディ様と違って黒い荒々しい感じの羊さんです。

しかもコミュニケーションとろうにも、頭に血が上っているようで、しきりに足元の土をけっています。

・・・どうやら、私たちは彼の夕ご飯を取った邪魔者のようです。けれどもノルディ様はちょっと腰が引けた私を庇って前に出ると、大きな角を悠然と振って見せました。

自然界において大きな体格、大きな角は種族の優劣を決定します。明らかにノルディ様のほうが角は大きく見事だし、体格だって大きいのに。

・・・なのに、黒い羊はノルディ様に決闘を申し込んだんです。

ノルディ様の眉間にしわがよっています。

えと、何を言い合っているのかわからないのが難点ですね。

お互いに遠吠えのような声を出し合って、真意を測っているようです。

そしたら。

「・・・ふざけるな・・・」

と、ノルディ様がうなり声を上げました。

決して大きい声でも、恫喝する声でもないのに、背筋がぞつとし

ました。

ちらりと、私を見たノルディ様が、ぎっと相手をにらみつけ、角を見せ付けるように相手に示しました。

相手も、低くうなると身を低く保ったまま、角を前面に押し出してかかってきます。遣り合うつもりようです。

「ノルディ様！」

「芽衣は下がっていなさい。誰が主かを忘れてしまった、哀れな獣です。・・・わたしの大事なものでよこせと言ってきましたからね、報いは受けてもらいましょうか」

やっと両思いになったのに！ とか。私の嫁に手を出そうなんていい度胸ですね！ とか言いながら、大きな角でがつつんがつつんやりあってます！ ・・・殺り、あってます！

・・・って、言うか・・・ノルディ様、両思いの、しかも嫁、いたんですか・・・。

お屋敷内には、小さきものと呼ばれる子羊軍団しか居ないので、知りませんでした・・・。

わ、なんか、鼻の奥がつくんとして、痛いです。じわじわと瞳に痛みが伝染して、視界が涙でにじんでしまいました。

あれ、やだな、しかもなんだか、胸も痛いのです・・・。

ノルディ様のような立ち姿も美しく、力に溢れた牡羊はきつと引く手あまたなのでしょう。

きつとハーレム状態で、うはうはしてるんだ。きつとそうだ。

私が気づかないだけで実は、小さきものはみーんなノルディ様の子供だったりしちゃったりなんだ・・・。

わたしは・・・わたしは・・・。

「うつく。べびーしたー・・・」

涙をこらえている間に、ノルデイ様は猛々しい牡羊に勝利していました。

\*\*\*\*\*

深い悲しみが胸を襲います。

何でこんなに胸が痛いのでしょうか。

・・・ノルデイ様に両思いの彼女、もしくは嫁が居るってことがことのほかショックだったようです。

でも、泣いてはいけません。こらえます。

折角ノルデイ様が迎えに来てくれて、もっふもふのふつかふかのお姿を、披露してくれて、もっふもふ独り占め！　なパラダイスなのに・・・。

ふかふかのふわふわの癒しの存在、睡眠誘導の神なのに。  
胸の痛みで眉がよってしまつて、いけません。

山からの帰り道、おつきなりユックを背負った私をこれまた背中に乗つけてくれたノルデイ様と二人きり。

心躍るはずのもっふもふパラダイスを堪能することも忘れ、どこか上の空で、お屋敷へと帰りついた私は。

ノルデイ様の背中から降りる前に、子羊たちに抱きつかれもっふもふに埋もれてしまいました。

「めえちゃん、心配したの。だいじよぶ？」

「めえちゃん、おささま、ふたりきり」

「でえとだ。でえとだつてみんなが言うの」

「めえちゃん、でえとつてなに？」

でえと。・・・ノルデイ様もお嫁さんと草原でえと、するのかし



ら。

ああ、胸が痛い。

そしたらひよいともふもふパラダイスから抱き上げられてしまいました。

ノルデイ様の逞しい腕。・・・腕？

間近にノルデイ様の壮麗優美なお顔がありました。

息も止まるつてもんです。

「芽衣、芽衣が私のために選んでくれた、あの草はとても旨かった」

ノルデイ様がそう話したら、子羊たちがぱあつと顔を明るくしてキヤツキヤツと笑いあった。

みんな口々に、「やったー」とか「おささま、おめでとー」とか言っている。

・・・何事でしょう。

あの草は、お迎えご苦労様ですの気持ちだったのですが・・・。

「芽衣が私を番に選んでくれて、私は嬉しい」

「・・・つがい・・・？」

「やっと両思いになれた。わたしの、芽衣・・・」

その後、熱烈な口付けに翻弄されて、気が付いたら寝室で。

あのときの勇ましいお姿からは考え付かないくらい優美な方からの執拗な求めに、涙も声も枯れ果てました。

・・・おいしい草を異性に分け与える事が、求婚に相当する行為だったなんて知りませんでした。

・・・ああ、それ以前に一生懸命ご飯を与えてくれていたノルデイ様の行為が、この世界における求婚だったなんて。

そして、彼の中ではあの時すでに、「両思い」の「嫁」認定された自分がいたなんて。

・・・私は知りませんでした。

\*\*\*\*\*

あの時感じた胸の痛みも、鼻の痛みも無くなりました。

今は泣きたいほど悲しいことはありません。毎日が充実しております。

ノルデイ様と、かわゆい子羊たちと、毎日もふもふに囲まれて、私は今日も元気です。

「芽衣」

「・・・お仕事が先ですわ！・・・で、でも、その・・・羊さんの姿になってくださったら、ブラッシングの順番を変えても・・・良いですわ」

顔が赤くなっているのは自覚済みですので、突っ込まないでくださいね！

でもこんな言葉に、嬉々として姿を変化なさるノルデイ様もどうかと思う今日この頃です。

そして、これほどまでにキュートな羊さんが、私は・・・だいきです。

羊の国からこんにちは。 3 (後書き)

楽しいお祭りでした。 快くオツケーしてくださった皆様に感謝いたします。

羊の国から明けましておめでとうございます！（前書き）

明けましておめでとうございます。

今年もよろしく願います。

羊の国から明けましておめでとつございます！

拝啓。

お父様、お母様。

明けましておめでとつございます！

そちらは寒くはないですか？

こっちは寒くても、天然羊毛100%でぬくぬくです。

外の寒さがうそみたいに室内はあったかいのです。

お世話になつてゐる羊族の上位種、ノルデイ様の居城には、居間に普通に暖炉があるのですよ！

そうです。憧れの暖炉！

赤々と燃える暖炉の前で、羊毛100%の長様と子羊たちともふもふで、ぬくぬくなんです。

ああ、お餅焼きたいわ。あ、いえいえ。

あんまり気持ちよくつて暖炉の前で寝ちゃうことも暫し。

それで、朝起きると傍らにはノルデイ様だけつて事もしばしば。暖炉に照らされて、ノルデイ様の秀麗なお顔が間近にあつてびっくりすることもしばしば。

・・・ああ、心臓に悪い。

・・・話がそれてしまいましたね。

お父様、お母様。

新年早々はそっちの世界が懐かしく感じられます。

ビバ紅白ですね。コタツでみかんですよね。年越し蕎麦はおいしかったです・・・あ、そうではなくて。

みなさま、悲しんだりしていませんよね？

たとえそちらに帰れなくとも、あなた方の娘は、元気に精一杯生きております。

郷に入っては郷に従え、ですからね。  
拙いながらもしっかり、こちらの流儀に則って、新年の行事に取り組んでいます。

だから、ご心配なさらないでください。  
あなた方の娘は、今日も前を向いています。

\*\*\*\*\*

「・・・で」

白銀の長い髪をかすかに揺らし羊族の長であるノルディさんは、  
目の前の少女に問いかけた。

目の前には黒髪、黒い瞳の愛らしい娘がひとり。  
文字通り天から降ってきた、私の花嫁。

空がきらめきを増し、風が急を告げるそこで、私目掛けて舞い降りた（いや、長様脚色しすぎ・・・）運命の少女。  
瞳の優しさに、声の麗しさに、優しい手の感触に、頬のすべらかさにいつしか囚われ、目が離せなくなっていた。

生きる為に、その瞳で見つめ探す姿は、好ましく写った。  
いつの間にか、自分の仕事を見つけ出し、周囲とも溶け込み、朗らかに微笑む姿に心疼いた。

・・・もっと、わたしを、頼ってくれればいいのに。

その娘のうるうるとした眼差しに引き込まれ、いつしか恋に落ちていた、ノルディさんだった。

・・・が。

周りの羊族は色めき立った！

特に長様を子供の頃から見ていた長老達の勢いは、増すばかり。

長様の恋だよ。長様の！

並居る美姫に目もくれず、仕事に明け暮れていた朴念仁の長様の

！・・・こ・・・恋！

・・・羊族が誇る長様は、眉目秀麗、実力本位の高物件、なのに今だ番はおるか、子供の一人も生まれなかったのだ・・・。

どうしちゃったんだ、長様！ まさか不能じゃないよね、長様！

その若さ、その美貌、その頭脳に囚われた娘達の、誘う眼差し、艶冶な仕草にも囚われなかったあの方が。

最近じゃ仕事が恋人なんだね、と長老達も諦めと共に呟いていたものだ。

わしらが生きているうちは、長様の子供を見るなんて夢のまた夢なのかもしれないなあ・・・。と言い合っては、がっくりと肩を落としていた彼ら。

それがある晴れた日。

空から降ってきた娘に微笑まれて固まった長様を見て、彼らは目を疑った。

あの、その無い長様の、娘に対するぎこちない動き。

触れる指先に電流が走ったかのような、長様の身の振るえ。

目の前を通り過ぎる娘の残り香を探すかのように、後を追いかける長様の眼差し。

「「「これは、まさしく「「「

花嫁、到来！ いやいや、気が早いかな？

盛り上がるのは羊族の長老の周りだけだったが……。

当の本人は、長老達に、淡い初恋の疼きを逐一報告されていたなんて知らないのだ。

・・・ちなみに報告していたのは子供達。

「あのねー。あのねー。めえちゃんがにこつとしたら、おささまがびくつとしたのー」

「まっかだよねー？」

「うん。おささま、真っ赤っかー」

「めえちゃんのおひざにコロンすると、おささまの目がこわいのー」

「めえちゃんにぎゅってしてもらつと、おささまの目がこわくなるのー」

「じじさま、おささまひどいのー。めえちゃんと一緒にお風呂のやくそくしてたのに、おささまがダメってめえちゃんにいったのー」

「こひつじはこひつじだけで、はいるのがデントウなんだってー」

「」「デントウってなにー？」「」

子供達と張り合ってる長様の姿が目に見え、長老達はあまりの不憫に涙（笑い）をこらえた。

「皆の衆。ここはひとつ、わしらが手をかさんと……！」

「そうじゃ、そうじゃ！」

「どじゃ、ひとつ。こういうのは？」

長老の一人が小冊子を差し出した。若向きのやたら、ラメピンクの本だ。

「・・・ほほお、「あなたの心をつちりキャッチ。コスチュームにもこだわって」か・・・」

どっから持ってきたんだ。そんなもん。だが、爺達は真剣に覗き込んでいた。



「ほおほお」

「わしらが頑張らんと、いつまでたっても長様の子供は見られんぞ！　ここはひとつ・・・」

「めえ殿にお願いするかのぉ・・・」

長様を見つめる長老達の眼差しは、日に日に真剣さを増していた。

押せつと瞳が、拳にこめられた力が、物語る。

・・・が、本人、まったく気付いていないのだ・・・。

今日もまた、芽衣の仕事場に急ごうと、ものすごい勢いで仕事を切り上げた有能なノルディさんを見つめる長老達の目は。・・・痛かった。

「・・・芽衣。それは、なに」

その身を飾る白いもふもふは・・・？

「え。だってウサギ年ですから！　これを編むのが羊の国の常識だって教えてもらったんです！」

似合う？　似合う？　とにこにこ笑顔で迫る愛しの芽衣の頭には、くると帽子。頭全体をすっぽり覆う、その白いもふもふの頭上に

ぴよこんと、耳。

中央はわざわざ毛色を染めたのかピンクの色あわせだ。

そして振り向いた可愛いお尻に、白いぼむぼむしたしっぽ。白い両手には大きい獣の手の手袋が。足にも同様の真っ白いもふもふの獣足の靴下？・・・いやルームシューズ？

・・・必死にそらした目線は、それでも胸元のもふもふを見逃さ

なかった。

胸元を飾るもふもふは、ボディラインを露にすると言うよりは、食べごろボディを隠していたが、その威力や凄まじい。

どこから見ても、食べごろのウサギさんだ。後姿に欲情しない狼おとしがいるだろうか……？

「……芽衣……」

「どうですか？ 力作なんです！ がんばったんですよ！」

くるりと一回りして見せた可愛いウサギさんは、にっこりと微笑んだ。

「長老の皆さんが教えてくれなかったら間に合いませんでした！ 今年は卯年だから、こういうのを編むんだよーって……毛糸だって沢山頂いて！」

「……長老、が」

これは、褒めて好いのだろうか。それとも何を馬鹿な事と怒るべき？

ああ、そうではなくて、そもそも、そんな風習あったっけ……？ と、ぐるぐるするノルディさんを横目に。

「あんまり、いい出来だったから、沢山編んだんです。それで、これを持って新年の挨拶代わりにあちこちの国にお邪魔しようかなー？ って……」

ウサギさんの国ははずせませんよね！？

これとおそろいの帽子と尻尾つきのもこもこブルマ、編んだんです。冷えは女の子の敵ですから！

「……芽衣……ばくだんを投下する気なんですね？」

ウサギの国の敏腕ウサギさんの齎す冷たい視線を想像して、背筋

が寒くなつたノルデイさんでした。

ウサギ国と国交断絶は痛い。痛すぎる。

「・・・おやめなさい・・・」

「ええ？どうしてですかー？」

可愛いのにー！ おそろいなんですよー？ ほかの国の落人さんたちと、もつとお近づきになりたいのにー！ だから頑張つて、夜なべして編んだのにー！

可愛い娘さんが頬を真っ赤にして言い募る。・・・しかもばつちり、ウサギのコスチュームで。

身を振るたび、頭上の耳がピコピコして、多分、お尻についた尻尾がぴるぴるしているに違いないと思つたら・・・！！！！

その可愛らしさに、ぐつとつまり、頬を染め、早々に白旗を掲げたノルデイさん。

周りの長老の目がよりいっそう、なまあたたかくなつた。子供達のつぶらな瞳が痛い。

彼らはもとより、愛しい娘の眼差しから（無理やり意識を総動員して）目線を（力技で）そつと外すと、・・・分かりましたと、呟いた。

「・・・ウサギさんグッズは、私が後で馬族さんに頼んで送つてもらいますから。・・・ウサギさんと猫さんと犬さんと狼さんと鼠さんと豹さんに竜さんに、蝙蝠さんに、それから当の馬族さんと・・・」

「

え。落人さんの数だけです！」

白くてもこもこな、ある意味爆弾並みの破壊力を持つであろう代物に、ノルデイさんは徐々に力が抜けていくのを感じました。

これ、贈る時にそつと詫び状、入れておかなきゃ、国交断絶になるかもしれない・・・。

いや、それよりも、お二人だけで楽しんでくださいと書き記すか・・・？

いやいや、冗談でもまずいかも……。

そんな気苦労で目を白黒させているノルディ様の横で、当の娘さんがにこにこしながらギフトボックスを積み上げていた。

「まだまだ！ 麒麟さんここに、白熊さんここに、鳥さんに、猿さんに、パンダさんとこなんて、一度行きたいです！と言うか、絶対行きたいです！ 行ってきたて、子パンダちゃんをなで繰り回したんです！ 良いですよー？」

小耳に挟んだんですけど、ものすごい癒やし系なんですってっ！  
見てるだけで、ボディブロー並みの衝撃の癒やされ状態らしいですよー！

脳髓直撃の愛らしさなんですって！

実は私、たれパンダも大好きで、あの気の抜けまくった所とか、可愛いですよー？

「……そう。芽衣は、羊よりもパンダが良いと……？」

背後からの威圧的な眼差しに固まった（生存本能！）黒髪のウサギ娘をひよいと担ぎ上げ、羊族の長、白銀のノルディが立ち上がる。

「あ……あれ……？ えと、あの……のるでいさまー？」

「娘！よくやったっ！」

「おお。よくぞ、やってくれた！」

担ぎ上げられた娘の目には、喜色満面の長老達が万歳している姿が写った。

「え……あれ？ なぜに皆様、そんなに嬉しそうに……」

さわりと尻（しつぽー）をなで上げられ、びやっと身をすくませるも、芽衣はノルディさんに身をまかせたままだ。

これぞ、気長に存在に慣らした結果とも言いが・・・娘にとってノルディさんの腕の中は危険領域ではなく、安心安全な絶対領域なのだ。

「・・・芽衣。大熊猫族より私が良いと、言っておくれ」  
言ってくれるまでは、離さないからね？

囁いたノルディ様の瞳は、優しい青。でもなぜだか、胸をざわめかせる青の瞳だ。

その迷子のような切ない眼差しに、芽衣は胸を引っかかれたような気持ちになった。

小首を傾げてノルディさんを見つめ、爆弾を落とす。

「・・・パンダさんも羊さんも、ふわふわもこもこで、幸せなの  
に変わりはありませんが、わたしの一番はやっぱりノルディさまで  
すよ・・・？」

その言葉に目を見開いて固まったノルディさん。

「・・・芽衣・・・」

高鳴る心のまま、抱きしめて、唇を奪おうと顔を寄せた時。

「・・・なんとって、安定感抜群ですからね！」

と、にこにこしながら娘さんがさらに爆弾を落とした。

また背中に乗せてくれるんですか？ とわくわくした顔でノルディさんの顔を覗きこむ娘に、毒気を抜かれた才オカミ羊さんと、がつくりと肩を落とす羊の爺達。

「ノルディさまー？」

「・・・ああ、そうだな。芽衣。また背中に乗せてあげよう」

「わあー！」

「「「わああー。いいなー。いいなー。めえちゃんだけいいなー」

「」

「ああ・・・むすめ・・・」

何か背後で、長老達がうめき声を上げ、子羊たちが羨ましそうに足元にジャレついた。

込められた力が、一気に抜けていく感じだった。

やっと、長様が、思い切ったのに！

やきもきする長老の前では、年端も行かない娘一人に翻弄される羊族の長様と、鈍いが可愛い娘の和やかな姿があった。

「・・・では、私が一番なんですよね？」

「はい！ ノルディ様のふわふわもこもこなお姿が一番です！」

「・・・ああ、芽衣・・・！！！」

二人が結ばれるまでには、まだまだ時間が掛かりそうだ。

羊の国から明けましておめでとつこねいます！（後書き）

結ばれ前ですね。

羊の国から。寒中お見舞い（前書き）

tmさまより、いただいたノルディ様のイラストです。ありがとうございます。ありがとうございます。

それでつい、触発されやってしまいました。

・・・これでは、芽衣がヘンタイっチックになるのも道理かと。もふりたい。

もふりたい・・・！



## 羊の国から。寒中お見舞い

前略。

お父様、お母様。

こっちは見渡す限り、銀世界です。

真っ白です。

白一色です。

むしろ白以外無いんじゃないかと、思うことしばしです。

・・・ついでに言えば。

寒いのです・・・。

あ、でも心配しないでくださいね？ 風邪なんかひいてませんか  
ら。

羊毛百パーセントの、ふわもこグッズで固めていますので、寒さ  
対策はばっちりです！

ふわもこのセーターや短パンやらで防寒対策は万全なのです。  
なんとたって手編みですから！ このざっくり感がいいのです。  
しかもしかも、シーカーも。

・・・ここだけの話、この毛糸、ノルディ様の長毛で、実に手に  
入りにくいと言う、マニアには垂涎の激レア超一級品なのですよう！  
あつたかいのです。なんだか、ご主人様に抱かれ<sup>いだ</sup>・・・あ、いけ  
ないいけない。妄想は大概にしないと。

ここに落っこちてから、糸紡ぎの仕方や、編み物も羊族ライフの  
生きる糧として、また未婚の羊族女子の仕事の一環として教わって  
日々成果を挙げています。最近じゃ、こんなセーターだって編めち  
やうの！

羊の群れに癒されてホンワカしたまま人生終わりそうだったから、  
このままじゃいかんと、落人の知識をひねり出しました。だって少

し位はお役に立ちたいじゃないですか。

ノルディック柄を圖案化してみたら、皆さんに大受けしました。ノルディック柄って言うと、ご主人様がびよんと反応するので、面白くて何度も言ってたら、なんか、ノルディック柄と総称されるようになったけどね。

長老と呼ばれる大御所の皆様にも、編み物の腕前を認めてもらいました。

はるか異世界にいらっしゃる、お父様、お母様。

願わくばこの手紙があなた方の手元に、たどり着きますように。

悲しまないで。あなたの娘は生きています。

悲しまないで。山に、星に、月に、雲に、水に祈ります。

・・・大丈夫、芽衣は、元気です。

\*\*\*\*\*

ニコニコしながら編み棒を動かすのは年頃の娘たち。

その中に、落人として羊国が預かる娘、芽衣の姿もあった。

彼女たちの周りには山と詰まれた毛玉の山。

・・・もとい、毛糸球が山積みされていた。

「めえちゃん、ここは？」

「ん。ひいふうみい・・・ひとつ編み目減らさないとだめよ」

「ああ、やつぱりね、うんと・・・こうかな？」

「そうそう」

「めえちゃん、こつちは？」

「色糸を重ねて、くるんで編みこむ・・・そうそう」

「きれいに編めるといいなあ」

「大丈夫、すごく上手だよ？」

あの人にあげるの。と少女が笑う。

私はあの人に。もう一人がまたはにかみながら微笑んだ。

くふふふ、と笑いながら、女の子たちは編み棒を動かしていた。

染まる頬、赤く、かわいらしい。

その談笑のただ中で、芽衣は幸せをかみ締めていた。

・・・女子会・・・！

これよ、これ。女の子同士で語らう他愛のないおしゃべり・・・

！ お茶に甘いお菓子に・・・コイバナ！

激しく女の子とおしゃべりに飢えていた芽衣は身悶えた。

最近なぜか、周りを爺と婆に囲まれて、じつとり物言いたげな眼差しに、貫かれ、こういった会話に飢えていたのだ。

・・・いや、話し相手はいるんだヨ。

ただ。相手が子羊だったり、長老たちで、話が微妙に通じないという弊害があることに目をつぶらないといけない。

「めえちゃん、めえちゃん。おささまに、えへってしてねー」

「えへ？」

「おおそうじゃ、そうじゃあ！ ついでにしな垂れかかってくれると尚の事良し！」

「めえちゃんがにこってしないとおささまがかあいそうなのー」

「しな・・・？ かあいそう・・・？」

「めえどの！ わしらの憩いはめえ殿にかかっているのですぞっ」

「目線はこう、こうじゃっ！ 憂いをこめてのう！」

爺が睫をばしはしさせて、天井を見た。・・・くもの巣あった？ 掃除しなきゃ。

「うるうるの目で見上げれば如何な長様といえども、ぐつと来るに違いないっ！」

いや、力こめて言われてもなんのことやら・・・。

「めえちゃんがえへってしたら、おささま、がむばるからねー」

「ガム・・・ばる？」

「おお！ そうじゃそうじゃあ！ 夜は寝かしてもらえんぞー！」

「

「「「ねー？」」「」

「「「のー？」」「」

・・・いや、キミたち、今の会話、どう突っ込みを入れればいいの？

羊族の長、ノルディ様は、雄雄しくも逞しく、優美なお方だ。

脳内にノルディ様の魅惑のお姿を浮かべただけで、うつとりできる。

「ああ、もふもふ・・・」

> i 1 6 9 1 7 — 2 2 9 4 <

長毛種の鏡のようなお姿は、白銀でどこか処女雪のような崇高さを思わせる。

思い返せば、後はもう。

「・・・あはああん、いい・・・」

あの長い毛筋に櫛を入れて・・・いやいや、まずは指ですいてあげなくちゃ。

やさしく絡まっているのをほぐしてから、ゆっくりじっくり、じらすようにブラシでグルーミングして。

頭頂部分から背中、なだらかなお尻、かわゆい尻尾と、嘗め回す

ように・・・いやだわ、舐めませんよ？ ブラシでそれぐらい丁寧に櫛梳つて、つやを出すのですヨ。

実際私がオシゴトした後の子羊ちゃんたちの毛並みの良さは折り紙付きなのです。

子羊ちゃんたちの弱いところ、良いところは熟知しているから、軒並み腰が砕けたようになっていくけど。でもそれくらい気持ちのいいマッサージ効果が期待される代物なんです。（色物じゃないのよ？）

だから、ご主人様だって魅惑のあなたへお連れできると思うのに。ご主人様は許してくれない。

それどころか、ある日、子羊ちゃんたちをお風呂に入れて、魅惑のボディマッサージ（毛すき）していたら、なんだか、子羊はそもそもひとり立ちするための訓練で屋敷に来ているのだから、手を掛けずてはいけないと言われちゃって。

それからなし崩しにお仕事（子羊もふもふグルーミング）が減らされた。

・・・私の憩いが。

和みと憩いの場をかえせつ。

子羊がだめなら成人した羊さんなら良いのか？ と思って申告したら、冷たい眼差しで問答無用で黙らされた。あれは怖かった・・・。

もの言いたげな長老さんたちの目線が痛かった。おっきなため息吐かなくてもわかってますって！

子羊ちゃんの毛並みをマッサージしているわたしが、アブナイ人に見えるんだよね。

確かに情操教育に悪いよねー。

はあはあしながら子羊の尻を追いかける女子高生。・・・女だからまだ許容してもらえるのよね。男だったら即効アウト。

以来、子羊グルーミングは減る一方。

その代わりに娘羊さんと談笑しつつ編み物製造が増えてきました。

あ、でもこれがいやというわけではないの。

コイバナ、楽しいし。

誰が誰を好きなんて話をこっそり聞かせてもらってときどきものです。

ただ、ノルディ様の名前が出るたびに、心臓がこれでもか！　つて跳ねるのがオドロキなんです。

ノルディ様を恋い慕う娘さんは羊族はおろか、ヤギ族の娘さんにもいるんですって。

そう聞いたとき、得体の知れない何かが渦巻いてしまつて、目の前がくらくらしたけど。・・・きつとあれね。コイバナにあてられたんだわ。うん。

ああ、でも。妄想は日々募るばかり。

いつそご主人様をもふもふしたい・・・！　・・・あ、いかんいかん。禁断症状かな。私としたことが。

白銀の長毛種の長様。優美なその体にこの櫛を入れたい・・・！　・・・いやまてわたし。

毛並みに沿つてやさしくマッサージをしてあげたい・・・！　・・・あああ、待てこら、わたしったらもう。

・・・でもさ、きつとだめって一刀両断なんだろうなあ・・・はああああー。

自分じゃ手の届かない角だつて優しく洗つてあげるのになー。

「・・・めえちゃん、角を洗いますって・・・長様に言ったの・・・？」

「・・・うんそう、何度も洗つてあげますって申告しているのに、

「ご主人さまつたら毎度逃げるんですものー・・・」

つぶやいた娘さんの周りで、娘羊たちは色めきたった。

これは、お・・・おさそい！

「め、めめめ、めえちゃん、それって・・・！」

「んんー？」

・・・芽衣の手のひらが何か太くて大きなものを支え持ち、ゆつくりしごきあげる動きをしていたが、芽衣の意識はとうにお花畑へ行ってしまっていた。

その仕草を間近で見ていた娘羊さんたちが、頬を真っ赤に染めてうつむいていたなんて、芽衣にはわからない。

「めえちゃんは、長様にあげるのですか？」

「え、何を？」

あげる？

あげるって何を？

そんな感じで小首をこてんと傾げた芽衣を見て。

娘羊さんたちはがっくりと肩を落とした。

「・・・恐るべし、天然さん・・・」

「いやあ、求愛行動の意味を知らないからよ、仕方がないじゃない。落人さんなんだから」

「長様も、それを知っているから、無体できないのね・・・」

成人した牡羊の角を触るなんて、婚約者が番の相手しか出来ないことなのに・・・！

そんな感じでこしょこしょ話し込んでる娘羊さんに芽衣は尋ねた。  
「あげる・・・ですね？ このセーターで良いのなら、ご主人様に差し上げますけど。。。？」

「・・・それはあなたが着なさい」「・・・」

娘羊さん達が指差したものは、ノルデイがわざわざ芽衣宛にとよこした毛糸玉で作ったセーターだった。

芽衣が今編んでいる・・・ノルデイ様の毛糸は白銀なのに光に当たると蒼く輝く珍しい毛だった。

人柄（羊柄）を模して白く崇高な感じがする、一品だ。

したり顔で羊娘さんたちは意気投合する。

天然娘には早い所、マーキングが必要だ。

お目当ての彼が、この天然娘に目を奪われたら元も子もないのだ！  
長様にはせいぜい張り切って、娘を落としてもらわねば！

「ちょうど、恋人たちの日が近いのですもの。めえちゃんが長様にお礼を言ったら長様喜びますわ」

「恋人たちの日・・・？」

小首をかしげる娘に、羊娘達は頭が痛くなる思いだった。

この娘、絶対、長様を意識してるのに、わかってない・・・！

「寒い冬を暖かく一緒に乗り越えましょって、贈り物をするんですよ」

「ノルデイ様の毛糸で編んだセーターを着て微笑んであげたら、きっと喜んでくれますよ！」

「そうそう。落人さんは獣姿になれなくて寒そうだって心配なさっていたから！」

「だから、取って置ききの冬毛を毛糸玉にしてくれたんですよ？」

「「「「めえちゃんにつて！」「」「」」」

「ノルデイ様は、でも、」

「大丈夫！　きっと喜んでくれますからね！」

そういつて娘羊さんたちは・・・笑った。

\*\*\*\*\*



そんでもって。

恋人達の日の当日。

和気藹々と言葉を交わす恋人達の、その中で。

ノルディ様の毛糸で作ったセーターを着込んだ芽衣の姿を、見つけるなり速効で攫って行ったノルディ様がいたとか。

雄雄しい羊の姿で、背中に娘を乗せて走り去る、二人の後ろで、爺婆たちが万歳三唱していた。

羊の国から。寒中お見舞い（後書き）

tmさまありがとうございました。小話、ご笑納いただけると幸いです。

## 羊の国からバレンタイン後記。

拝啓、お父様、お母様。いかがお過ごしですか？

こちらの世界では、いまだに白銀の世界が広がっております。

そちらはもう雪も消え、花粉が猛威を振るう季節でしょうね。のろわれろ、スギ花粉。

こちら寒いのですが、ご心配なく。百パーセントウールのおかげで暖かく、日々すごしております。

暖炉の暖かさと、人々の暖かさ。

冬の国は、人（獣？）の暖かさが身に染みます。

ついでに暖かい食べ物も胃に染みます。体重計が怖いこのごろです。だっておいしいんだもん！

お代わりを我慢していると、爺様たちが「嫁の心得」とか寝言を言いながら、器にお代わりをよそってくれるので、断るのも必死です。

ってか、爺様。それいつの時代の情報ですか。女はどうしりした腰周りじゃないと子供を沢山産めないって、戦前の常識、今非常識なんですよね？

でも食べないと、長様が血相変えて、すわ、医者だ、女医は居ないのか、と騒ぎ出す始末でして……。

だって規定の量は食べてるのに……。お代わりいらないうって言うてるだけなのに……。

増えてないといいなあ、たいじゅう……。

明日と言わず今日から、子羊ちゃんたちとお散歩増やそう。

そんな冬の空ですが、さすがに日中の日差しが暖かさを増したよくな気がします。

雪解けの音が時折鳴り響き、集落のそばを流れる河の水量が増えてきました。

春はすぐ其処のようです。

今年はじめに咲く花を、お父様とお母様にお贈りします。

願わくば、願いを込めたこの便りが、あなた方に届きますように。

遙か異世界にいらっしゃる、お父様、お母様。

・・・芽衣は、元気です。

\*\*\*\*\*

どつと音が鳴り響く。

緩んだ雪の斜面が音を立てて崩れていった。がけ下から上がる水しぶき、雪下から覗く地面は、いまだ色を持たず、茶色にくすんで見える。

だが、いずれ其処も緑の淡い萌えに彩られるのだ。

完全防備の山登りスタイルで身を固めた芽衣は、その雄大な自然を見つめていた。

山の中腹、集落の端。瞳は心細く揺れている。

「めえちゃん、大丈夫よ？」

「長様、強いもの」

「そうよ」

芽衣と同じく完全防備の娘羊さんたちのほんわり笑顔に癒されて、  
淡く芽衣は微笑んだ。

そうだ。こうして待っていても仕方がないのだ、と思い直す。

「そうだね！ ご主人様たちが帰ってきたら、温まれるように、  
屋敷の中のどこもかしこも暖めて、温かい飲み物を準備しておこう  
！」

何がいいかな？

雪山探検して来るんだから、ミルクよりお酒が良いよね？ ホツ  
トワイン？ それともホットブランデー？

ああ、お腹も空かしているだろうから、具沢山のスープなんか良  
いかも。

彼女たちに声をかけて、芽衣は館へ戻った。

いつの時代も、どこの世界でだって、女は弱いだけではないのだ。  
「全部の部屋の暖炉に薪をくべようね！ いつみんなが帰ってき  
ても大丈夫なように、暖めておこう！」

「うん、めえちゃん」

「あったかい飲み物準備して・・・男の人だから、お酒のほうが  
良いよねえ？」

大人の男の人に対して、ホットミルクじゃいくらなんでも、ねえ。

「うちの人、ホットワインに、スパイス入れたのが大好きなの！」

「私のうちではこういう時は、ホットワインにオレンジのスライ  
ス入れるわよ」

「私のあの人は、ホットブランデーの方が好き。お砂糖ほんの少  
しね」

「ふううん。日本じゃ、卵酒って言ってね、お砂糖と卵なんだ  
」

「へええ、いろいろね」

「全部作っておく？ いろいろ楽しめていいかもしれないわ。後  
はそうねえ・・・めえちゃんが、この間作ってくれたあれもね？・・・

・うふふ、きつと長さま喜ぶわ」

顔を合わせてくすくすと微笑む娘さんたち。

相手の好みを知っているのって、その人だけ特別だって言ってるみたいでうらやましいなあ。

・・・ご主人様は、何がお好みなんだろう・・・。そう言えいとも草だし、人型になった時、好き嫌いなく一通り食べてくれたなあ・・・。

「ええと、お酒だけじゃなくて、温まるスープなんか良いよね？」

「二枚貝のミルクスープ！ 彼の大好物なの」

「あらやつぱり、ミルクとバターたっぷりの野菜のシチューじゃない？」

・・・それは羊の国の伝統行事。

毎年この時期、男衆で隊を作り山に入るのだそう。残った女衆は帰りを待っているんだって。

手をふりながら見送った、雄雄しい羊さんの群れを思い出した。始め、人型で山に入るのかと思って、ノルディ様を必死で止めたんだ。

冬山登山ってあぶないんだよ！

どんなベテランでも遭難するときがあるんだ。

毎年ニュースでよく聞いた。冬山に入るのはとても難しいんだって。あのイモトでさえ躊躇する冬山！

・・・心配する私に、ノルディ様は懇々と説明してくれた。

「私の養い親も、養い親のそのまた前の養い親も、みんな等しく、私たちに授けてくれました」

それは、聞けば聞くほど形状といい、状態といい、山芋のことだ  
と思った。

草花が茂る頃は生えている場所の特定が難しく、だからあえて冬  
に敢行するんだってさ。

枯れ残った弦を辿って、地面に隠れるそれを掘り起こしてくるん  
だって。

冬の山だからこそ、根茎に蓄えられた栄養が段違いに高いのだっ  
て。

「昔はこれを食べねば上位種になれぬと信じられていた食べ物で  
ね……。だから館で預かる小さきものには、必ず冬これを与える  
んだ。まあ、おまじない、と言うか……。願いだろうね」

それは、切なる願いなのだろう。子供に与えられるなら与えたい。  
それが毎冬行われることならばなおさら、……。やらねばならない。

そういつて微笑んだご主人様は、誰よりも力に溢れ誰よりも美し  
かった。

落人で異邦人の私が口出ししていい事じゃないと、悟ったんだ。

だから、ノルディ様の服をぎゅっとつかんで、下を向いたまま、  
「待ってます」と伝えた。

調理場で野菜と格闘する娘羊さんに混ざって、ジャガイモの皮を  
むいた。

順調に行けば、戻ってくる頃だ。ただ待っているより、何か仕事  
をしていたほうが気が晴れる。

暖炉に火が灯り、着々と、男たちを迎え入れる準備が整っていく。ホットワインとブランデーはアルコールが飛んでは仕方がないので、先に野菜スープを仕上げることにした。もくもくと皮をむいては洗うの繰り返し。みんな大切な相手の好みを知っていて、何が欲しいのか想像しては準備に走っている。それを私はうらやましく見ていた。

だって、ご主人様のお好みなんて分からない。

何を作ってもいつもにつこり微笑んでくれる。美味しいです、芽衣は上手ですね、と褒めてくれる。その言葉にうそはないと信じられる。

でも、こういう時何を準備したら良いのか、さっぱり分からないのだ。

「めえちゃん、どうしたの？」

「めえちゃん？　なんか、真っ青だよ？」

「めえちゃん？」

「どうしよう、わたし、ご主人様のお好みを知らない・・・」

衝撃の事実発見だ。

自分の好みを押し付けていただけで、一度も好みを聞いたことがなかった！

「え、だって長様、いつだってめえちゃんの作るお料理とお茶を褒めているわよ？」

「何を出しても褒めてくれて嬉しいけど、ここはこうした方が良いたか言ってくれないの。きつと、お優しいから、あまりに口に合わないものでも無理やり飲み込んでいるに違いないの・・・！」



「すごい笑顔で自慢されたことあるわよ、私。めえちゃんが「私」のためだけに作ってくれたチョコレートなんですよ、あげませんからね！って」

「そこがご主人様のおやさしいところなのよ・・・」

バレンタインの時期には、ココアを利用してバターと生クリームと砂糖でガナッシュを作ってみた。

粒状のころしたチョコレートトリュフ。

ものすごく感激して嬉しそうに食べてくれていたけど・・・はじめて見る食べ物食べるのって、勇気いるよね？

なまこやウニを始めて食べた人と比べるのはなんだけど、インパクトはあっただろう。

娘羊さんたちも始めは引いてたモン。

「・・・何も言わないのは味付けに満足してるからじゃない？

口に合わないなら食べないわよ」

「満足してるわよ。この間の海老のスープだって、長さま散々会合で自慢してた」

「そうそう。あ、ちょうどいい。海老のスープの作り方教えてくれる？ 今度うちの人が食べてみたいって言ってたの・・・」

元が動物なだけに、この国では肉は食べない傾向です。

肉食ランドじゃどうなのか分からないけど、羊国は基本草食。

なんちゃってベジタリアンになりつつある現在。お豆と卵と野菜、海草にお魚少し。

それでも落人は何でも食べるって知っていたからか、ご主人様はわざわざ取り寄せてくれようとしたんだ。

でもやっぱりみんなの前でお肉を食べるのは嫌だったし、そもそも食べる気が起きない。

だから、お肉じゃなくて海産物をお願いしてみた。

海老や貝を食べたことが無い人（羊？）たちばかりだったから、まずはスープと思ったの。

海老、貝からいい出汁が出て、遠くに飛べる味だったよ・・・。

「大丈夫よ、めえちゃん。長さまは満足してるわよ！　むしろ満足しすぎでめえちゃんを屋敷から出したくないんだから」

「そんなのわかんないよ、ご主人様の好み、分かってるつもりになつてた・・・！　ああ、わたししたら、一度もお伺いしたことなかった！　お口に合いますか？　つて」

「・・・イヤ、絶対長様満足してるよ・・・」

お仲間の年頃娘羊さんたちは力が抜けた。

わかってない・・・！

この子、ぜんっぜん、分かってない・・・！

誰でもない、めえちゃんが、長さまのためにだけ作ったある意味超激レアなブツを前に、あの長さまが満足しないはずはない・・・！　むしろ今の言葉を聞いただけで、速攻長様に襲われる。閨に押し込まれて十五歳以下は見ちゃダメ！　な状況に絶対陥る！

「・・・なんていじらしいことを言うんでしょうか、この唇は！　・・・とか言いそう」

恋人を待つ花も恥らう娘さんが、大きなため息つきながら呟いた。

「なんていじらしい・・・！」

「そうそう。こんなかんじ・・・うええっ！」

扉の向こうでは感涙に咽ぶ長様の姿が。雪に塗れているせいか、いつもより数段白い。

白銀の髪に雪の結晶が煌いて、天然のスパンコール状態の、派手派手さ。仄かに染まる頬が淫靡です。

そして、いつにもまして、やる気満々の青い瞳！

娘羊さんたちは慌てふためいた。

・・・にー！ 逃げっ、逃げてええっ！  
めえちゃん、逃げてええっ！

羊の皮をかぶった狼がここにいるよおおおっ！

でも長さまの眼差しが、怖いので言葉に出来ないの・・・！  
めえちゃん、私たちの目力に気付いて頂戴！

「あ、ご主人様！」

そんな狼に、獲物はほんわりと微笑んだ。心底安心したと言わんばかりの笑顔だ。

その笑顔の横で娘羊さんの緊張も高まっていく。

「ご主人様、お疲れ様でした。あの・・・」

「ずいぶん心配させましたね。でも大丈夫です。みな無事に帰りましたよ」

その瞬間の花のような笑顔に毒されて、狼の勢いが静まっていく。

「・・・よ・・・良かった！ みなさま、ご無事なんですね？」

「ええ。芽衣。それより・・・」

「わあ、よかったー！ 怪我した方はいませんか？ みんな心配してずっと御山を見上げていたんです。ああ、ご主人様、お疲れでしょう？ あちらにスーパの準備がされてますから、皆さんでどうぞ今お給仕しますね！」

「あ、ああ、芽衣・・・」

差し伸べた手を上げたり下げたり。

芽衣は背筋を伸ばし、木の器とスプーンの入ったワゴンを押し出

しつつ、ノルディ様を部屋へいざなった。

物言いたげなノルディ様の情けない顔は、娘羊さんたちの笑いのツボを刺激したらしい。

二人が居なくなるのを見計らって、とうとう吹き出した。

「くく、く。お・・・長様、形無し・・・！」

「めえちゃん、なんて見事なスルー！」

「無事に戻ったって瞬間で、今まで悩んでいたことすっ飛んだんだね」

「長さま・・・不憫・・・」

「いやいや、まだまだ」

ホットワインとホットブランデーのポットを手に、娘羊さんたちが後に続く。

大広間では赤く燃える暖炉の前に、男たちが衣装をといていた。

欠けることなく戻ってきた男たちの姿に、娘羊さんの顔もほころぶ。

「ホットワイン、スパイス入りで温まりますよ、いかがですか？」

「ホットブランデーもありますよ？」

温かな飲み物を手から手へ渡しながら、長い冬の幕切れを祈る羊の国の住人たちだった。

\*\*\*\*\*

にぎやかなひと時が終わり、館が静まり返った。

おせっかいな爺様と婆さまたちも皆帰りつき、館に残る者は、ノルディと芽衣、そして小さきものと世話役の羊だけだ。

暖かな暖炉の前で、芽衣はブラシを手に白銀のノルディの毛並みをゆつくりと梳いていた。

赤い光に照らされて、陰影が揺れる。

「・・・皆さん、ぶじでよかったですね。貴重な滋養芋も沢山取れて、これできつと小さき者たちは立派な羊さんになれますね」

「そうですね、芽衣」

ゆつたりと時が流れる。ブラシのリズムはマッサージ効果も兼ねているから、思わず眠りに引き込まれそうになってしまふ。

「スープはお口に合いましたか？ やっぱり寒いでしょうから、ホットワインをお持ちしましょうか？」

「いいえ。今はこのまま・・・そうですね、後で芽衣の作った、シヨコラショー、とやらを飲んでみたいです」

「ああ、今日の・・・」

「ええ。チヨコの香りが素敵でした」

ブラシでやさしく毛並みを整えながら、芽衣が頷く。

今日、卵酒以外に芽衣が作ったものにシヨコラショーがあった。娘さんたちに作り方をせがまれて教えた代物だ。

「ココアにコアントロー代わりにブランデー入れたんですけど、人気がありました・・・女の子に！」

男の方たちはもっぱらお酒のほうを嗜んでいましたよ？

「・・・そうだったかな？ でもあの香りは、この前いただいたトリュフに似ていて・・・あれは・・・芽衣の・・・かお、り・・・」

「

ノルディは眠気と戦いながら、芽衣に身を任せた。

柔らかな娘の膝に頭を乗せて、角を優しくしごかれて。ブラシでやさしく梳られる。

花に届くのはやさしいシヨコラの香り。いつか頬を染めて差し出された丸くて甘い、そうまるで芽衣のような。

「蕩けて、しまふよ、芽衣・・・」

うつうつと、まどろんでいた。

夢の中。

「……ノルディ様が無事で良かった……。怪我をしないで戻ってきてくれて本当に良かった……」

角の付け根に優しいキスが降りたのにも、気付かずに、白銀のノルディは眠りについた。

目覚めたらきつと、いじらしいこの娘は尋ねてくるのだろう。

「ノルディ様の一番のお好みはなんですか？」と。

……答えはすでに決まっている。

羊の国からバレンタイン後記。(後書き)

・・・このへた<sup>r</sup>げふげふ。

襲え！ と思ったのはさくらだけでしょーかー・・・。

羊の国から、春便りSmile Japan (前書き)

心配してくださった皆様へ御礼です。

本当に感謝しております。ありがとうございました。



## 羊の国から、春便りSmile Japan

拝啓

お父様、お母様、お元気ですか？

羊さんの国では、雪も解け、青々とした草が姿を現しています。ちらほらと咲いた色とりどりの花が、誘っているようです。

子羊たちは、春一番に咲く花に、挨拶するんだ、と言っては館を抜け出し、草原で草塗れになっています。

今日も抜け出した子羊ギャングを追っかけて、草原にきました。子羊ちゃんが花に向かって頭を下げて・・・下げた頭が重かったためか、ころんとそのままでんぐりかえし。草に塗れて笑っています。

・・・なんなの、ここ。

これ以上の天国つてあるのかしら。危うくいけないところに飛びそうになっちゃったわ。

ビバ、異世界とりっぷ。

ビバ、もふもふパラダイス！

鼻血をおさえつつ、サムズアップも忘れません。

・・・ついでに美味しそうな草のリサーチも欠かしませんがね。

その笑顔にみんな春の訪れを待っていたんだなあ、と思うのです。

凍てつく寒さは厳しければ厳しいほど、温かな風に心湧き上がりますものね。わたしだってそうです。

寒い夜は子羊に包まって眠りたいです！

きつと至福極まりなし。想像だけで、ごうとうへぶんですよ。飛べますね。

・・・なのに、なぜかいつもご主人様に拉致られます。あれ？

お父様、お母様、ご主人様だったら、ずるいんですよ！ 雄雄しい羊のお姿で、高みから悠然と流し目くれるんです！

・・・そうそれはまるで、海辺で繰り広げられる、恋人と白いワンピースのお嬢さんの駆け引きのごとく！

あはは、うふふと誘うんです、そりやもう見事な流し目なんですよ！ あのお姿を見たら・・・見たら・・・おっかけずにいられましょうか！？

否！

そももう、鼻息も荒く、全速力で追いかけますとも！

ひらりひらりと交わされますがね（泣）こんちくしょー！。二本足が心底憎い！

だが、負けるもんか！ と、おっかけっこ。

後ろで子羊たちがエールをやらんと送ってくれるのも、ご愛嬌。

応援してくれるのね！ と俄然やる気が起こります。

まかせて！

今日こそはあの魅惑のもふもふに顔をうずめるの！

必死に追いかける私を流し見て、ご主人様がふつと微笑んだのを、見た気がしました。

それで、はつと気付けばご主人様の「腕の中」なんですよ「腕の中」・・・。

・・・そーなんです。

拉致られたら、途端に人型に変化なさるんです！ もう、もう、ずるいっただらないです！ 人肌にならない、ふわもこぷりーず！

羊さんのふわもこの毛皮の中に頭突っ込んでぐりぐりしたいのに  
！！！！！

「ひつじ！ 羊型希望！」

「いやです」

それで、強引にご主人様に添い寝された翌日は、あちこちに虫さされの痕が沢山あるのです……。

服の中にまで入り込んで血い吸っていく、根性のある虫なんです。しつかりパジャマ着込んで寝てるのに、ナゼ。

今朝も。

「……また……」

ありました。

痒みがないので気付きにくいのよねえ……。あらやだ、太ももの内側にも。

「こんなとこまで……」

しつかり着ていたパジャマを脱いで、戦闘服めいどふくに着替える途中、まともや発見したそれに、うっん、と首を傾げてしまいました。

毎日、風通しよくして、お布団干してるのに……！

いる。確実にいる。

遙かなる異世界にいらっしゃるお父様、お母様。

何かの拍子でこの手紙が届いたら、ぜひバルサンと、蚤取りブラシ（大型犬猫用）を！

……いよし。今日も気合入れてご主人様をグルーミングしよう  
つと！

\*\*\*\*\*

「めえちゃん、はいこれ」

お友達の娘羊さんが真っ赤な顔ですずいと差し出したのは、手触りのいいスカーフでした。

「めりーちゃん？」

はてなを増産しながら、わたくし、娘羊さんを見つめました。

おそろいのメイド服を着込んだ彼女の名前はメリー。名前も似て、年も近く、さっぱりした性格の彼女とは出会った頃からの仲良しです。

彼女は変化する前は、そりや器量よしの淡いピンクの羊さんなんですよ。

長いまつげを見ているとそれだけで、天国にいきます。変化すると淡いピンクの毛並みが、そのまま頭髪になっていて、青い瞳とあいまってとてもとても可愛いのです。

以前そのままの姿の彼女に抱きついて至福のひと時を過ごしていたら、なぜか彼女の異動が決まって焦ったつけ……。

可愛いだけでなく彼女は実に有能で、私にメイドのいろはを教えしてくれた貴重な人（……羊？）なので、必死にご主人様を説得しました。

異動の話が消えるまで、メリーさんと会えなくてずいぶん悲しい思いをしました。

思い返しながら、じー……っと見つめていました。

あ、赤くなつた。

白いお肌にはのぼのと血の色が乗せられて初々しいやら、可愛いやら。もー、メリーさんったら女殺し！ いえ、ワタクシ限定かも

しれませんがね。この初々しさに当てられる変態は。

「もう、メリーさんだったらそんな顔で見ちゃだめですよ！ 犯罪者が増えちゃいますからね？」

微笑ましくなつてにっこり笑つて、ありがたくスカーフいただきます。

それにしてもナゼでしょうか、こうして朝一に首に巻くものを手渡される回数が増えた気がします。

でも寒いので首筋に巻きますけどね。まいていると、ほのん、と暖かいのです。

「うふ。暖かいです、ありがとうございます」

「いいえ。めえちゃんもそんなうるうるした目でじっと見つめちゃダメよ？ 変質者はすぐそこにいますからね？・・・まったくもー、長さまったら・・・」

なんだか、メリーさん、お怒りモードのようです。

でも変質者なんていますかね？ 私は自覚のある変質者ですから、省いて下さって結構ですよ？

あ、でもこれって、好機ですよ。今日こそは是非とも胸に秘めていた問いかけを聞いておかなければ！

「あの、めリーさん、その・・・この世界に、蚤取りブラシってあるのかなあ？」

「・・・は・・・？」

「メリーさん、ごめんね、気分悪くしないでね、皆がそうって訳じゃないの！ 子羊ちゃんたちとお昼寝してた頃は虫刺されなんかなかったもの！ でも毎日ブラッシングしてるのに、ご主人様が添い寝されると、その・・・虫刺されが、ひどくて。きっと身体が大きいから、頑固な蚤が取り除けないんだわ！」

この世界に蚤とりブラシがあるのなら、是非今日から使いたいです！

真剣な面持ちでメリーさんに申告したら。

メリーさんたら、絶句して目を真ん丸く見開いたあと、むにゃむ

にやと口元を動かして・・・。

「が・・・頑固な・・・ノ・・・ミ・・・」  
「メリーさん？」

だん！だん！だん！ とテーブルをたたきながら悶絶しているメリーさんの前で、途方にくれる娘の姿。

それをそつと物陰から見つめる・・・爺たち。

「・・・長さま・・・」

それぞれがゆっくりと頭をふって、がつくり肩を落としたのを、勿論娘は気付いていない。

\*\*\*\*\*

なんだろう・・・。

今日は一段と皆の目がなまぬるい気がする・・・。

羊族の上位種、白銀のノルディは、決算書類に目を通しながら、そんなことを思っていた。

書類を渡しに室内に来る、羊族の若者が、私を見るなり目を白黒させているのだ。なんだろう、出直すのか？ 泣くのか？ 笑うのか？ なんなんだ、貴様らいたい。

その違和感に気付かないほど、私も朴念仁ではない。

それでも仕事のスピードは揺るがない。なぜなら今日もこのあと

芽衣を誘いに行くのだからな！

「押してだめなら引いてみよ、か・・・」

呟いた言葉に、室内に陣取って茶を飲んでいた爺たちが咽ていた気がしない。

過去、落人を娶った先代の遺言だ。言いて妙ではないか。

追いかけても追いかけてもこちらを振り返りもしなかった、子羊、娘羊ラブの芽衣が。

ピンクの羊毛に包まれて寝ている芽衣を見つけたときは、嫉妬でメリーを殺せると思った。

いくら先々代の秘蔵っ子とは言え、私と芽衣の逢瀬を邪魔する輩は排除する。

だが異動を告げれば、芽衣が泣いて引き止める始末。

だが、先代の日記を爺に進められるままに読み進むうち（他人の日記を読むなどイヤだと言ったが、爺にすごい勢いで進められた）先代もまた同じような苦労をしていたのか、と胸を打たれた。

子羊に嫉妬し、娘羊に嫉妬し、ぎらぎらと落人の背後を狙っていた先代。解る。解りますその気持ち・・・！

狙った落人を褥に誘い込むために行った、涙ぐましい努力。

仕事を速攻切り上げ、落人の下に通いつめ、貢物をしたが、悲しいかな人間は牧草は食用にあらず撃沈したとある。

・・・身に積まされる内容に、やがて日記にのめりこんだ。

先代の落人への気持ちと重なる、私の芽衣への思い。届くのだろうか、この思いは。この思いが届かなければ、先代は・・・ひいては私は、芽衣をどうするのだろうか・・・？

読み進むうちに怖くなり、ページを繰るのを躊躇うようになった頃。

そこに一筋の光明が照らし出されたのだ！

物言いたげなそぶり、見つめると人族はそちらから寄って来ると書いてあった。

目を疑った。だが先代は一縷の望みに縋りついた。

追わず、見つめ続け、自分の元へ近づくまでじっと佇んでいたら、落人の方から手を差し伸べてきたそう。

指先が触れた瞬間の喜び。瞳が重なったときの歓喜。全てに感謝の言葉が刻み込まれていた。

・・・身が震えた。

それでは、芽衣もそうなのか？ そう思って、先代の仰ったバイブル（日記昇格）の通りに、芽衣の手の届かない高みに立ち、瞳に言葉を託して見つめた。

ただ、瞳に思いを乗せて見つめていただけ。

それなのに。

あんなに、あんなに頑なだった芽衣が・・・！

わたしを追いかけて、来た。



この震えるほどの歓喜。

ありがとうございます、愛の伝道師（先代昇格）愛のバイブル！

ついに芽衣が私を追いかけ始めましたよ！ 胸が高鳴ります！

・・・あ、ちなみに先代とは山羊族との縄張り争いに競り勝った、羊族の伝説の英雄。

女傑・サラマンディーさまのことで、生涯の伴侶となった落人は、人族の侍、新衛門と呼ばれる青年だったそうです。

読み進むうちに内容が怪しいものになってきたので、これは代々の長、それも落人を伴侶にしたいと考えている長にのみ、閲覧を許可するとしておくかな？

サラマンディーさまを英雄視する者には、少しまずい内容だ。

なんたつて、羊族のサラマンディーさまと、新衛門殿の話は吟遊詩人の歌になるほどの大恋愛と言う話だったはず。

・・・落人殿を追い詰めた挙句、最後は新衛門殿にサラマンディーさまが全裸で馬乗りになって、むりやり搾り取ったとか、後世にばれたら叶わん。

絵姿に残っているが、サラマンディーさまは、燃えるように赤い毛並みの美しい、雌羊だ。胸も腰もインバインの、熱烈巨乳美女だ。あれに乗っかられて、子種を搾り取られる・・・天国だろうか、地獄だろうか？

山羊族との戦いだって本当のところ、山羊族の長の求婚を新衛門殿のために蹴ったからだと言っしなあ・・・。

・・・まあ、なんにせよ、先代は先代。後世に伝え聞く話は、晩

年熱烈ラブラブでいちゃいちゃのし通しだったようだから、どこかで意思の疎通は図られたのだろう。・・・多分。

ふ。だが、私は芽衣を深く愛しているから、問題は、ない。

芽衣も私を愛してくれるはずだ。なんたって私のほうが、子羊の中の誰よりも毛並みも手触りも最高に良いのだからな！

さて、今日も獣に戻り、芽衣の気を引くとしよう。

追いかけてくる真剣な眼差しに身を貫かれ、身もだえするほどの歡喜に焼かれよう。

追いかけているつもりの芽衣を、その実私の部屋に追い詰めて、その身を拘束しよう。

今宵も芽衣の寝顔を間近で見つめながら、その白い素肌に口付けよう。

芽衣の隣はこれからずっと、

・・・私のものだ。

羊の国から、春便りSmile Japan (後書き)

・・・うん、どんなにかっこつけても、おささま、蚤扱い。

## 羊の国から（前書き）

少しでも微笑んでいただけたら、幸いです。

## 羊の国から

「・・・・・・・・ちんくしゃだな」

「・・・・・・・・」

拝啓

はるか異世界に居られます、お父様、お母様。

のっけからあれなんですけど、目の前のおっさん、敵認識してもいいですよ？

「羊族のノルディともあろう者が、小娘一人に惑わされていると聞いたぞ、本当か？・・・・で、これがうわさの落人か・・・・・・」

だから、そのタメはなんなんだ！

むきーといきり立って真っ赤になってる私を、ノルディ様が抱き寄せて、よしよしといなしてくれた。

目の前のむさいおっさんは、山羊族の上位種、ラグエルさんだそうです。それでもノルディ様と同じ年だって言うんだから、生命の神秘だ。熊と女神が山羊と羊ってあんだ。

大体ちんくしゃ発言だってね、たいていの女の子は仕方がないと思うよ！

だってサイズが違いすぎる！

あんたの隣に立って、つりあうサイズの女の人なんて・・・なんて・・・いるのか？

ノルディ様くらいの上背ないといけないだろうし、ノルディ様と幼馴染ってことはこの美貌を見慣れているってことだし。

きつともすごい面食いに違いはないね！

ノルディ様と張れるくらいのも美貌の主を探しても、そんな美貌の主、早々見つからないだろうし・・・。

あれ、まってよ、それ以前に。

まじまじと見上げてしまった、らぐえるさん〓熊。

「・・・らぐえるさんの初恋って、もしかしなくても、ノルディ様・・・？」

うわー、ありそうで笑えねえ・・・。

ぼつりと心の中で呟いたはずの言葉。

「・・・この、ちんくしゃめ」

は！

いやん、声に出しちゃった！

口をふさぎ、上目遣いで恐る恐る見上げれば。

あ。

目が合いました。

あ。

すごい目で睨まれました。

あ。

あああ、でも、そっか・・・。

腐女子に目覚めて早五年。審美眼は培われていますとも！

まさか、ここにきてこんな展開が拝めようとはお釈迦様でも思っ  
まい。今までノルディ様につりあう麗しの殿方がいなかったし、そ  
れ以前にこの生活に慣れるので必死だったおかげで忘れてまし  
たよ、憩いを！

そうと決まれば！  
芽衣、燃えます！

「ほ・・・ほほほほ。わたくし、お茶の準備をいたしてまい  
りますね！ あ、それともお酒のほうがよろしいでしょうか？」

どっちだ！？  
どっちが攻めなんだ！？

絵的には、熊が攻めで女神が受けなんだけど、ご主人さまあれで  
隠れマツチヨだから。

・・・しかも、美形鬼畜攻めって、子宮が疼くのよね。

熊だって、よくよくよく見れば、結構美形さんときた。

むさいその髭剃りなさいよ！ おっさんと見られるのを良しとし  
ているの？ ああ、年若い長にありがちな、威厳を保つための手段  
か何かか？ だが、勘違いはいけないよ！ むさいおっさんと、さ  
わやかマツチヨじゃ、月とすっぱんなんだよ！ 腐女子的にはね！  
しかも熊のくせに鍛えているのか、無駄な贅肉の欠片もないじゃ  
ないか。

冒涇だ！

美貌に対する冒涇だ！ 即刻髭をそりおとせ！

俺様熊受け・・・？ 今そんな需要あるかなあ？

「――いーな！ 無いなら作るまで！」

硬くこぶしを握りしめ、雄雄しく叫んだ。・・・ら。

「芽衣？」

「ちんくしゃ？」

「・・・聞き捨てならないな、ラグ。私の芽衣をちんくしゃ扱い  
か？」

「・・・小猿なら良いのか？」

はるか頭上で熊と女神が、言い合いを始めた。

まあ、それはこっちに置いていて。

ああ、ペン！

切実に今、ペンが欲しい！

押入れのダンボール（小）に入れたままの必須アイテム、ペンに  
インクにスクリーントーン。

それが無理なら、せめてパソコン！

目くるめく禁断の熊マツチョ受けの世界を披露するのに！

俺様熊を組み敷いて、妖しく笑うノルディ様。・・・あ、いかん。  
鼻血が。

なんか、ここに来て、ノルディ様はやはり攻めだと認識を確かに  
しました。萌える。

遥かなる異世界に居られるお父様、お母様。

願い通じて宅配便が行き来するようになったなら。

押入れの「趣味の箱（なか見ちゃダメ！）」をそっくり送って欲



しい、芽衣でした。

敬具！

\*\*\*\*\*

「芽衣？ 芽衣、どうしたんですか」

「……………なんか、微妙にずれた娘だな」

頭上で熊と女神が呟いてるけど、気にしてなんかいられない！

うふふ、熊を可愛く酔い潰してー、男を意識させるあの髭を無かったものにしてー、さらにノルディ様には俄然やる気になってもらわなくっちゃああ！

あ、いけない。

犯る気だったわ！

「……………なんでしょう、悪寒が」

「……………お前もか。奇遇だな」

熊と女神が身を震わせている。

さむい？ 寒いなら暖炉に火を入れますが、それより人肌がよろしいかと思われます。この時ばかりはもふもふなんて無粋な事言いませんし、言わせませんよ？

「ぜひ、肉弾戦でオネガイします！」

あらやだ、心の声駄々漏れ。

「……………さらに寒気が」

「・・・そうか、俺はめまいが」

「お好みのお酒を準備いたします、お客様。何なりとお申し付けくださいませ！　そんなもってめくるめく欲望の彼方へ！」  
につこり。

営業スマイルよ、芽衣。私は今、ぼったくりバーのママ！

「・・・う、うむ」

「・・・そのためにはなんですか、ラグ」  
目を白黒させる熊を尻目に、なぜだかご主人様がずずいと私の前に、割り込んできた。あれれ、熊が見えないよー？

「ラグエルは、所用が済んだらすぐに帰還します。もてなしはいのですよ、芽衣」

しんと冷えた氷のような声で、ご主人様が言い捨てた。

・・・あつ！

「で、では、ワタクシは次の間に控えておりますので、御用がございましたらお呼び下さいませ！」

慌ててそう言って、きびすをかえした。

いけない、いけない。

大事な熊に女の影なんか見せたくないその気持ち、わかります、

ノルディ様・・・！

そつとおきましようね、芽衣。

長い冬で会えなかった空白を埋めるべく、見詰め合って、手を取り合って、そつと身を近づけあいたいに違いないんだから！

うん、胸がずきん。とするのは気のせいなのです。

会えない時間がふたりを燃え上がらせて、抱きしめあって、確か

め合って、めくるめく、ピーでピーで、ピピピピなことになるためには、私のような小娘は必要ないですもの。

次の間に控えて、あんな声やこんな声が聞こえてきても、聞かざるを貫くのよ！

別に、ね、かすかに聞こえたご主人様の「・・・・は、私・・・・ものだ」にきゅんきゅんしたり、熊さんの「貴様は羊ぞ・・・・の、ノルディだ・・・・う！」に萌えてなんかいませんよ？ いまさんからね？

・・・・でも。ど、どんな構図なんでしょう・・・・？

やつぱり、迫るノルディ様に押し掛かれて、恥じらいに顔を背ける熊でしょうか？・・・・いいわあ。

それとも、はかなく目を伏せるノルディ様に、押し掛かろうとする熊でしょうか？・・・・ううん？

ワタクシめとしましては、やはりノルディ様は鬼畜攻めで行って欲しいところですが、いかんせん押しが弱い様なので、うまく熊に交わされてしまってるように聞こえます。

ここは、押さなきゃだめですよ、ご主人様！

ぐりぐりと、押しに押さねば、そ知らぬ顔で交わされます！  
熊との種族どころか、性別までも超えちゃった愛ですもの！  
ご主人様が押さずして、どうします！

「・・・・何度も・・・・言う・・・・は、わたしのものだ！」  
おお！

「ノル・・・・っ！」

いよし！

後はあのむさくるしい髭をそり落として、同衾できるように大きな目のベッドに放り込んで！

・・・でも、ご主人様、あの熊の変わりに、毎晩、私を抱き枕にしていたというのなら。

・・・カーナーリ、ショックです、私、小熊ですかー？

「めえちゃん？　めえちゃん？　何してるの？」

ピンクのメリーさんがいきなり目の前アップで現れて「きゃあ！」と叫んだら、「芽衣！」と叫んで飛び込んできたご主人様に、がばつとだきしめられてしまいました・・・。そんな情熱的な事は、熊さんにこそするべきなのに！

「いけません、ご主人様！　誤解されてしまいますよ！」

「誤解？」

「え、えつと、こ、恋人に勘違いされては！」

「・・・芽衣は、私が嫌いかな？」

どこかむつとされた顔でノルディ様が仰るのに慌てました。

「きら、きらいなんて！　滅相もございません！」

大好きです！

全身全霊でラブと叫びますとも！

ふわふわの、もふもふの、雄大なお姿。理想の偉大な獣の王さま。抱きしめて毎日でも、もふりたいのに！

「・・・芽衣・・・わたしも、芽衣が大好きです」

毎日抱きしめて、嘗め回して、毎晩挑みたいくらいに。

「・・・へ・・・？ あ、はあ・・・」  
挑むつて、何に・・・？

「・・・悲鳴を上げたから、心配して飛び込んできたんだが・・・  
なんだ、そのグラスは・・・ナニヲシテイタ、キサマ」

熊さんが心底、疲れたように呟いた。

「え、ええと・・・え、えへ？」

あのですね、これを壁に押し付けて、耳を澄ますと良く音が聞こえるんですよー？

あ、でもー、こっこの部屋で声が筒抜けなら、あっちの部屋でも筒抜けだよねえ・・・。

\*\*\*\*\*

ああ、何処で燃やせばいいの、私のこの溢れんばかりの創作意欲  
(腐女子熱)。

「・・・こいびと・・・デスカ・・・」  
らぐえるさんには、将来を誓い合った恋人ヤギがいて、その恋人ヤギのため  
に羊族推奨のノルディック柄の毛織物を、注文しに来たんだって  
さあ・・・ちええつつ。

ちなみに冬寒いこのあたりじゃ、織物の質のよさと、図案が高い  
評価を得ている。

絨毯なんて目ン玉飛び出るんじゃないかって額ですよ。

去年の出来栄えの良さに注文が殺到してて、娘羊さんに混ざって  
私もがんばって織りました！

「・・・たしかに見事な出来栄だ。これを図案化したのが、このちんくしゃだと思つと・・・首を捻りたくなるがな・・・」

才媛と名高いメリー殿の手ではないのか？

「ふざけるな。私の芽衣をちんくしゃ、ちんくしゃと！ 貴様に融通したくはないが、しかし、目出度い席だ。花嫁に免じて譲つてやる！」

この冬最高の一枚だぞ！

芽衣が図案化したノルディック柄は人気で、織つても織つても生産が追いつかないんだぞ！

「・・・ふん。小猿の名を呼べば、その一枚を融通してはくれるまい？ 名を呼び、その織り手を褒めたなら、」

白銀のノルディが、どうでるかなど、白日の下に明らかだ。

いったい何年の付き合いだと思つのだ？

「キサマの独占欲など、当の昔にお見通しだ！」

憧れの乳母殿に微笑まれただけで、家から放り出された身の上としてはな！ 寒かつたな、あの時は。

「くっ！」

「・・・ま、如何に想像以上に可愛らしくとも、話の通り麗しの娘であつとも、貴様の前であからさまにその小猿を褒めることなどできんな。・・・ああ、勿論、俺の花嫁殿がこの世で一番だがな」  
はっはっはーと朗らかに笑う熊さん。

「このひげ！」

「ふん、なんとも言え！ 思いが通じて俺は今最高に幸せなんだ！・・・貴様と違ってなっ！」

「この、熊！」

「ふ、白銀のノルディともあつものが、落人一人に振り回されて・・・！ いい物を見た！ これ以上はないほど、いいものが見れた！」

あっはっはー！ と朗らかに笑う男の声が、聞こえる。

見送りに立ったノルデイ様と熊さんが、何事かを言い争っているようだ。

仲、良いなあ……。

でもさー、やっぱり、現実問題、三次元でのボーイズラブって難しいんだねえ……。

「良いカップルだと思ったのに……」

私は、はああああ、と大きなため息をついた。

いいえ。落ち込むにはまだ早いわ、芽衣。

「この世界の娯楽充実のためにも、是非活版印刷技術の推進を……！」

まずは、小さな木に反転文字を彫ることよね。

組み合わせで文章を印刷できるようになったら、本の増刷も可能かもしれない！

是非、手先の器用な羊さんとお話がしてみたいな。

そしてゆくゆくは。

「異世界初（発？）ぼーいずらぶジャンルの確立を……！」

（……いえ、決してこの世界そんなもん求めていないから）

「芽衣？」

「ノルデイ様！ 私がんばりますからね！」

「は？……え、ええ、がんばって、くださいね……？」

白銀のノルデイの切なる願いは、いまだ娘には届かない。





## 羊の国からあなたの知らない世界

「・・・で、この場合の薄幸少女を、この超絶美形の薄幸少年のR青年に置き換えるんです」

「・・・え、ええ・・・」

各々方、頭の中でつつシミュレーション！

己の想像以上にすばらしいものはないんだよ？

だっってお好みのままに、好きな相手を思えるんだ。

想像上の相手の誰に自分を重ねるかで好みが分かれるけどねー。

俺様鬼畜受けが好きか、強気子犬系受けが好きかでも雲泥の違いだし、体育会系元気も攻めか受けかに分かれるし、美形鬼畜でも攻めか受けかで細かく枝葉が分かれる。

マニアックな方なら伝家の宝刀、銀縁めがねが登場するだろうし、リーマンが好きならネクタイの登場だろう。アイテムひとつ取ったって、千差万別。

皆様のお好み男子をツリー状に細分化していったら面白いことになりそうだわー・・・。おとと、話があっちに行っちゃうわ。

さて、娘羊さんの脳内シミュレーション終了を見越して、私はおもむろに言葉を紡いだ。

「・・・男女の純愛物より背徳感が増しませんか？ 幾多の困難を乗り越えても乗り越えても、立ちふさがる最大の障壁！ 身分の差、種族の差、そして・・・性別の壁。でも好きだった相手がただ同性だったと言うだけで、彼らは何も悪いことはしていないの！ 立ちふさがる常識と言う壁、報われない彼らの思いは昇華されるべき！」

周りに集まった娘羊さん（ごく一部）がごくごくくと頷いた。

・ふ。たやすい。

ニヤリ。と笑いたいのを押さえつけるのに苦労しました。

拝啓。

異世界におられますお父様、お母様。

芽衣は、この世界で、同志を見つけました！  
(レベルアップ時に流れるファンファーレを脳内にご用意ください)

ばーいずらぶジャンルの確立も、あながち夢じゃないかと思われます。

敬具！

\*\*\*\*\*

「・・・なんでしょうね。最近侍女の目線がおかしいんです・・・

・・・ある日、そう呟いたのは羊族が誇る俊英の長さま。

『見目麗しく、能力抜群、さすが羊族を率いる長さまよ、と各国の長にも一目置かれる存在の彼。』

白銀の髪を揺らし、目線を伏せるその姿は、美の女神像のようだ・

・・・』

「・・・あ、でも実は隠れまっちゃんなんですよね、ご主人様は。脱いだらすごいんですから、ここは『美の女神』と言うよりも・・・

ううーん『闘神のような』、かなあ」

と、長い睫をばしばしさせて誰ともなく虚空に言い切った娘を、白銀のノルディは抱き寄せた。

「・・・芽衣？ 誰と会話しているのです？ 私の側に控えるときは、私の言葉だけに耳を傾けなさい」

「え、本文を練って・・・うはあ！ いえその、も、勿論です。ごしゅじんさま！ ご主人様の事しか考えていませんよ！ だってノルディ様はお顔はそりや女神様みたいですけど、ひよろひよろしてないですし、実は鍛えていらっしやるから、胸板とか実はすごいんですー！」

「・・・芽衣・・・」

ほんのり赤くなったノルディが、そつと抱き寄せるも、娘はわたししながら己が墓穴を掘ったことに気付かないでいる。

傍目から見れば、恋人たちの抱擁だが。

実にいい雰囲気なのだが。

当の娘と言えば、あたまのなかで妄想がぐるぐるしていた。

そりやもう、ピーがピーしてびびびびなんだ。

（ばれたら困る！ 困りますって！ じ、じつはこっそりとノルディ様モデルの鬼畜美形攻め・ラグエルさんモデルの強気俺様受けで小冊子作ってましたーなんてバレたら・・・）

「ひよえ・・・」

・・・娘の顔が一気に青く、なった。

「・・・芽衣？」

「え、ええと。はい！ 誠心誠意、ご奉仕させていただきます！ 何なりとお申し付けくださいませ、ご主人様！」

「・・・ご奉仕・・・意味・・・分かって・・・いま、せんね」

やや、言葉につまり、目の端を仄かに染めて、流し見るそのお姿。

麗しいです！ 麗しいです、ノルディ様！ どんな淑女も敵いま

せんよ！

ああああ、もー、惜しいな！　なんで今ここにるのがわたしなんだ？　なんで色男が一人もいないんだ！？

肉弾戦を極彩色で飾れる強面のまっちゃん兄さんか、ノルディ様を押し倒せる優美な美形がいれば・・・！　ノルディ様と攻めの奪い合い・・・もといマウントポジションの取り合いが見れたのに！　はだけの胸板！　飛び散る汗！　引き倒されまいと歯を食いしばって・・・やがて訪れる快感に抗うその姿・・・ああ、もたえる！

やっぱり、男子たるもの肉弾戦よね

でもまっちゃん受けて、好みが分かれるからな・・・嗜好を掘り起こそうと試しに今書いてるけど、やっぱりここは見目麗しい少年が必要かなー？　ううん、悩むなー。

レースとフリルをふんだんに使った白いドレスシャツを着た美少年なのかな、やっぱり。

でもさー何でか、ご主人様の側近って、既婚者さんか爺さましかいないんだよねー。食べごろ男子はいないのか？

周りを見渡すも、ぎゅっとうさぎ抱っこされたわたしを暖かい目で見つめる爺さまと（孫か？わたしは孫か？）、微笑ましいのかどうなのか、珍獣見る目でわたしを見つめるおっさんしかいません。

必然的に貴重極まりない、天然記念物クラスのノルディ様の麗しの微笑を見れたのは、わたしとこの部屋にいる極少数の側近さんだけ。

ああ、もったいない。

わたしなんかそんな貴重な表情えがお見せてる場合じゃないですよー？　その笑顔を振りまいたら、落ちない男はいないと思うんだけどな。

「ええと、ノルディ様の為にがんばります！　お疲れでしたら、子羊昇天間違いなしの魅惑のボディマッサージを、ご主人様に行使

いたしますよ？」

子羊命名のゴールドフィンガーをわきわきさせて、頭上の女神を見上げれば、長い睫を伏せさせて苦笑するノルディ様と目が合った。

\*\*\*\*\*

・・・落人であるわたくし、岸 芽衣の、命の恩人で衣食住の神である白銀のノルディ様。

ただ麗しいだけじゃなくて、視野が広く、明晰で、ひとりの取りこぼしもないように治められた羊国はとても平和だ。

信頼されてる羊族の長さまで、預かっている領土の御領主様で、山間部に生息する羊や山羊族の統治者で。

たおやかな外見からは、およそ考えられない位の仕事量をこなすその姿は、尊敬に値する。

お役に立ちたいの。

今もそう。

娯楽を履き違えているかもしれないけれど、活版印刷技術の推進は間違っていないと思うのね。

小冊子を作って情報を発信するってことは良いことだと思うの。

ぼーいずらぶに限らず、童話や伝承を残すにはいい手だと思うのね。

・・・何事も、挑戦あるべし。

そうよ。かの芥川龍之介先生も嘗てこうおっしゃった。

『人間を人間たらしめるものは、常に生活の過剰である』と。

『僕らは人間たる尊厳の為に、生活の過剰を作らなければならぬ』と。

『過剰を、大いなる花束に仕上げねばならぬ』と。

・・・いや、過剰すぎるか、ぼーいずらぶは・・・。ううむ。

などと考えていたら、頭の上でくすつと笑ったご主人様が囁いた。

「・・・では、いつもの時間に飲み物を運んでくれますか？ その時にその魅惑のマッサージをお願いしますね」

「はい。でもノルディ様・・・ずるは無しですからね!？」

あはは、と笑うご主人様を見上げて今度こそ勝利するんだ、と心に誓ったわたしだった。

飲み物運ぶのはいつもの仕事です。

毎晩、寝る前にノルディ様に飲み物デリバリするんだけど・・・。それは簡単そうदैいて、実はものすごい難しいミッションだったりする。・・・個人的には。

「・・・う、うう。ずるしないって約束したのに・・・」

ノックして、応えがあつたので、ドアを開けました。

手に持ったトレイを落とさなかったわたしを褒めて！　ねえ、褒めて！

「・・・ずる？　マッサージしてもらいたいからこの姿なのだが・

・・・」

「は・・・反則です・・・」

鼻血出るかと思いましたよ。

巨大なベッドに横たわる、白銀の牡羊様の絢爛豪華なお誘いのポーズ！

目ン玉つぶされるかと思いました！

寝そべってわたしや人畜無害な、愛玩動物なんですと言わんばか

りの流し目に！

ついふらふらと近寄って。

おつきなベッドによじ登って、夢見心地で擦り寄ってしまいそうな自分を、誰か止めてクダサイ。

「芽衣・・・マッサージしてくれるんでしょう？」

「・・・は」

くりんと小首を傾げた、美貌の牡羊サマの、輝かんばかりの「かまって」ビームが！ うああ！

負けました。

負けましたよ！

トレイをサイドテーブルに置いて。

どきがむねむねの状態で、そつと手を伸ばす・・・。

もふっつて！

もふっつて、ふわっつて！！

うはあああ！

もふもふの毛皮に手を入れて、暖かな温もりに頬を緩ませた。（なでなでなでなでなで）

言葉は要らないの。自分の鼻息は荒いけど何も言わないし言わせないわ。（なでなでなでなで）

ああ、暖かなこの温もりにひとたび触れたら、脳神経が焼け落ちてしまうの・・・！（なでなでなでなでなでなでなで）

目を細めて、気持ちよさそうに顎なんかあげられて、「めい」な

んて名を呼ばれちゃったら・・・！！！！（なでなでもふもふなでなでもふもふなでなでもふもふ）

至福。

恍惚。

至高。

「あ、はああああん・・・さいこー・・・」

言葉の意味を正しく噛み締めて、昇天しちゃったわ・・・。

言わないで、分かってるから。

そのとき自分がどれほどしまりのない顔をしているのか、恥ずかしくって誰にも見せられない！

至福の顔で、ご主人様を撫で繰り返しているなんて、ほかの羊さんに言える筈ないんだからあ！

・・・で、気がつくとき遅い胸板に抱きこまれて、はたと我にかえるのを、毎日毎晩繰り返しましたのよね。いい加減学習しようよ、芽衣。このハニートラップ侮れないのよ・・・！

「あ、ああああ！ ず、ずるい・・・！」

もふもふの羊さんがいつの間にか、人型なんです。

もふもふがあ！ と涙目で見上げると。

「ずるいのは、どちらですか・・・」

ため息つくように呟いたご主人様が、苦しそうな顔でわたしを見つめた。顔が近いです！。

「まったく自分の変化した姿に妬く日が来るなんて、思ってもいませんでした」

いい加減、わたしの腕に慣れなさい。それとも毛皮がなくなるとも安



眠できるようにしてあげましょうか？

ずいっとご尊顔が近づいて、吐息が唇にかかった。

無言でぎゅうつと抱きこまれて、頭も身体も足も絡め取られた。

胸とか、腰とか、隙間のないほど重なって、ときどきしたのは内緒です。

ご主人様の心臓の音を耳にして、安心して力が抜けたのはもっと内緒なんです。

「・・・動けないです。ご主人様」

「今日はここで休みなさい。ひつじになってあげますから・・・芽衣・・・」

そして羊に包まって眠るんだ。

泣きたいほどの安心感に包まって眠れるのは、なんて幸せなことだろう。

\*\*\*\*\*

・・・ご主人様の侍女さんは沢山いる。それこそ知らない羊さんも沢山いる。

でもお部屋に夕刻、飲み物を持っていくのはわたしだけだ。

以前一回か二回顔を合わせただけの娘さんに、面と向かってその役目を譲って欲しいと言われたこともある。

でもメリーさんが、言い返してたっけ。

「貴女が持つて行っても、長さまは決して喜ばないわ」

編み物仲間の娘さんも、みんな口をそろえて庇ってくれた。

「長さまは、今までこんなこと、めえちゃん以外に頼んだこと無

かったのよ？」

・・・ねえ、どうしてかなあ。一晚牡羊姿とは言え、ご主人様に拘束されたまま眠りにつくのは胸が苦しいんだ。

・・・何でか最近、胸がしきりにじくじくと痛むんだよ。変なの。

「・・・それは、めえちゃんに長さまに言わなきゃダメよ」とメリーさんや娘羊さんは笑う。

ご主人様は治療法を知っているのかな。

「めえちゃんだって、分かってるのよう」

メリーさん、メリーさん。

みんなもにこにこ笑いながらわたしを見るけどさあ。

ご主人様にぎゅってされると苦しいんだよう。

「早く分かれるといいね」

メリーさん、メリーさん。

自分で気付かないとやっぱ、ダメなのかなあ？

「お休み、芽衣。良い夢を」

「はい。お休みなさい、ご主人様」

いつか分かるなら、今わからなくても仕方が無いかなあ。そう思いながら、大きな羊に擦り寄って娘は眠りについた。

その娘の寝顔を見つめる牡羊の姿があった。

\*\*\*\*\*

今日一番の書類を手にとって、白銀のノルディはまじまじと見つけた。

『企画書・めえちゃん発、小冊子の発行願ひ』

概要を読み進むにつれ、ノルディさんの眉間にしわがよってきた。

芽衣が進めるものならば、許可はしたい。許可はしたいが……。

「なんですか、これ……」

初回の発行部数を考慮して、まわし読みを検討しているようだ。主要施設にて閲覧できるように、とある。

が。

『男子禁制（特に長さま）』

これってどういふことなのだろうと、頭を捻るノルディ様の姿があった。

羊の国からあなたの知らない世界（後書き）

長さまが攻か受けかはご想像にお任せ（？）  
でもばれたら。

ばれたら・・・！（がくがくぶるぶる）

## 羊の国から桜だより

拝啓。

はるか異世界にいらっしやる、お父様、お母様、お元気ですか？

梅は咲きましたか？ 桜の花は如何ですか？ 桃の花はまだかしら。

連翹も、沈丁花も、つつじ、木蓮、雪柳も、先を競って咲き誇っている頃でしょうね。

庭の水仙は咲いたかな？ 毎年植えていたチューリップ、今年の色は何色かな？

一面の芝桜は、今年もきれいでしょうね。

山間のあの町は、雪解けを向かえ、春めく花の競演で、さぞや見頃でしょうね。

目を閉じると浮かびます。五感があの姿、あの香りを覚えています。

・・・大丈夫まだ覚えてる。

花見山の見事さは、言葉には出来ない。

鶴ヶ城の千本桜は、そこにいるだけで時代を超えてタイムスリップしたみたい。

夜ノ森の桜は、文字通り夜風に吹かれて行くべきだと思う。

田村市の夏井川の千本桜はまるで夢のよう。

会津の石部桜も、三春の滝桜も、美里の伊佐須美神社の薄墨桜も、  
たった一本の桜にあれほどの感動をもらえる。

信夫山の紅しただって時間を忘れて見入ってしまうんだ。

南湖公園、釈迦堂川、名だたる桜の名所には不思議な魔法がかか  
ってるみたいだったね。

・・・もつと、あの景色を噛み締めればよかった。

何気ない日々の積み重ねが、いつも当たり前そこにあるものが、  
離れてみると、こんなにもいとおしくなるなんて。

くすんと鼻を鳴らしたら、ご両親様のかわりにご主人様が飛んで  
きて慰めてくれるから、心配しないでね、芽衣はひとりじゃないよ。

物申すならひとつだけ。

ご主人様、なんで、もふもふじゃないの・・・？

ごつごつした胸板が頬に当たって、心底、悔しいです。

\*\*\*\*\*

「長老様。お山にピンクの花をつける木はありませんか？」

「嫁御、び、ぴんくの花・・・？」

「はい。嫁じゃなくて芽衣です。ピンクの花です。五片の花びらか、もしくは八重なんですけど、色も白っぽいものから、濃い紅色までさまざまなんです」

むう、耄碌しちゃだめよ、爺様ー。誰が誰の嫁なのさ。孫かと思えば娘と言われ、さらに嫁か・・・やれやれ、末期だな・・・。  
遠いところを見つめていたら、爺様ズが顔を突き合わせ、あーでもない、こーでもないと論争を始めた。

「ピンク。ピンクのう・・・」

「そんな花をつける木があつたかのう」

「りんごは白いか。それにまだじゃし」

くりんと小首を傾げる爺様ズ。

これはこれで癒し効果が無いとも言えない・・・。限定羊型でお願いしますけどね！

「・・・のう、あれじゃないか。にがーい実しかない、花だけの」

「ああ、あれはたしかにピンクじゃあ」

「ああ、あの役立たずかあ」

「・・・花は見事だが、その後うまい実もつけないし、いろいろと用途に困る木なんじゃよー」

「・・・役立たず・・・うん（がっくし）たぶんそれです・・・」

さくらんぼは、改良品種だからー。見つけても改良しないと無理そうだー。

用途ね、用途・・・桜の花や葉っぱは塩漬けにして、桜餅の原料かな。後はスモークチップの材料か・・・。

そんなことを考えながら、爺様に教えられたとおりの道を通り、春先の山の中で子羊たちと、ようやく第一山桜を発見しました！

遠目でも空に溶け込む桜色が見えます。

「みんな、あの桜色の雲のところまで頑張って歩こうね！きっとお弁当美味しくなるよー」

そう発破をかけて子羊たちと歩いた。

桜の素晴らしさを、こっちのみんなにも伝えたいと思って、始めた遠足だけど・・・この木、爺様ズに聞いてた以上にすごいや・・・。

到着そうそう、ぱっかりと口をあけて見上げてしまった、それ。

「「「「「うわあああ」「」「」「」」」」」

子羊たちも絶句した。

天から降るピンクの星のようだ。さわさわと音を立てて揺れている桜の古木。八重桜のしかも枝垂れは見事だった。

「めえちゃん、良いにおいするねー」

「かいだことない、においだねー」

「あのね、これが桜の香りなんだよ」

「さくらー？」

「さくりゃー？」

「さくらー？」

「おし。ではみんな、この木の根元に座りましょう！」

シートを敷いて、その上にあたたかいラグを敷いた。それから背



負ったリュックを下ろした。

わたしの周りに子羊たちが腰掛ける。

おのおの背負ったリュックからお弁当を出していた。

わたしはと言えば、朝かまどで焼いたパンに、春の野菜サラダに、果物沢山。

子羊たちが道々摘んだ、ヨモギやタンポポ、スミレやギシギシ、葛の新芽に、ウコギの新芽なんかも並んでいる。道草。立派なおやつだ。

羊のお乳で作った、ちょっぴりしょっぱいチーズを配り、羊さんのミルクをみんなのカップに注いで準備完了。乾杯。

もしかしたら食べ始める子羊を見て癒されて、桜を見上げて癒される。

木漏れ日が、きれいで、涙が出そうになる。

「・・・石部の桜か、滝桜みたいだなー・・・見事だわー・・・」  
なのに、爺様方には不評なお花だなんて。

基本実のなる木が珍重されるのはわかるけど、実がなくて使い道がないから厄介者扱いなのが悔しかった。

だって桜は日本人の花だ。

「実がならないくらい何よー。滝桜なんて地域経済に貢献して観光の底上げしてるのにー・・・」

うつむ、と小首を傾げる。

「花見の習慣がないから・・・だな。きつと・・・」

この世界では、花を愛でる習慣が無い。  
きれいな花はきれいだね、で終わるのだ。  
やはり、ここはひとつ一肌脱がねば！

「おなか、いっぱい」

「おなかばむばむー」

「ばむばむー」

ぐぐつと気合を入れていたら、子羊たちの気の抜けまくった声に現実に引き戻された。

おとと、忘れるとこだった。

「そうだ、今日は、デザートも持ってきたのよね」

「……わーいわーい、めえちゃんのでじゃーとっ!」「……」  
ぱあつと明るい顔で手放して喜ぶ子羊たち。周りをびよこびよこ飛び跳ねて、とても可愛い。

彼らにいろいろ作つたものは、好評なんだ。

……お山の天辺で摘んだ、香り草の次にだけどね。

「ふふん。香り草には叶わないかも知れないけど、これだってすごく美味しいよー」

その彼らの目の前に、わたしはあるものを取り出した。

四角い箱の中にみつちり入った、黒いもの、黄色いもの、つやつやした透き通つたもの。

小豆もどきで作つたあんこ。大豆もどきで作つたきなこ。しょうゆもどきで作つたみたらしたれ。

本当は黒ゴマも入れたかったんだけど、ゴマつてもものすごい高級品らしくて……。くるみもどきも探したけど見当たらなかったの  
で、今日はこの三品。

あんこ、きな粉、みたらしを迎えるのは、色艶も良い緑の草だん  
ごだ!

結構かさばったけど、やっぱり、これが無いとお花見は始まらない  
よね!

「……なに、これ。めえちゃ……」

「おだんごよ! お花見団子って言うの!」

「『『『『『おだんご？』『』『』『』』」

「甘くて美味しいよ。ほら」

ひとつ楊枝で刺して自分の口に入れた。懐かしい味に自然頬が緩む。

見慣れないものでも、子羊たちの好奇心は果敢に挑戦を叫んだようだ。わたしを真似て、ひとり（いつぴき？）が楊枝でひとつをつまみ上げ、口に入れた。

もぎゅもぎゅもぎゅ。・・・ごくん。

「・・・・・・・・」

じつと見続けると、真剣な子羊の頬がばら色に染まり、ぱああつと花が開いたように明るくなった。

「・・・・・・・・つおいしーっ！！！」

・・・ふ。勝った。

身振り手振りで如何に美味しいかを伝授しようと子羊約一名は頑張ったが、その前にみんながお団子に殺到した。

「めえちゃん、これ美味しいねー！ あまーい草の味がしたよぉー？」

「・・・・・・・・（反応するのはやはり草か・・・・・・・・）うん。ヨモギいれたの。おいしいでしょー？」

「ヨモギー？ヨモギってこんな味だっけー？」

不思議不思議と子羊たちが群がってくる。

口の周りにあんこついてたり、きな粉ついてたり、果てはみたらしのたれで貴重なもこもこが・・・のおおおおっ！！！！

でも、慌てない。

芽衣はベビーシッターを極めるのです。

ぬらしたタオルで、順々にやさしく毛並みに沿って食べこぼしをふき取ってやる。

うん。いいこ、いいこ。

「・・・茹でてすり潰して粉に混ぜて、蒸して搗いたの。また作ってあげるね」

「ふうふううん。むずかしいんだねー。でも美味しいの嬉しいの。また作ってねー？」

まさにその時閃いたの！

「おおお、お花見団子・・・！盲点だったー！！！」

「」「」「めえちゃん・・・？」「」「」

きよとん。

小首傾げる悩殺ポーズの子羊たちに、あやつく鼻血ふきそうになったよ・・・。

なんて可愛らしいの、キミたち・・・！

「おぐうつ！・・・だ・・・だいじよぶ、大丈夫・・・（親指ぐっ）」

はあはあしながら鼻血をふき取るわたしってやっぱり変態なのよ。

\*\*\*\*\*

「・・・で」

白銀のノルディは、優美な眉を痛みをこらえるように寄せた。

頭痛が、する。

気のせいではあるまい。

「ええとですね。その後、速攻で帰って、爺様・・・長老様にお

伺いを立ててー、で、長さまの許可が必要なんだといわれまして」

「……………（またあのじじいども）」

白銀のノルディはそつと目をそらした。

……本音であれば逸らしたくはない。

誰にも見せないように部屋の鍵は速攻でかけた。芽衣は気付かなかったようだ。無防備ぶりを喜ぶべきか、しかりつけるべきか。

だが、邪魔者はいないのは明白だ。おそらく爺どもが壁に耳を押し付けて中を伺っているだろうが、邪魔はしないだろう。

だが、その手に乗ってたまるものか。芽衣の貞操は守る。守るべきだ。守られるべきだろう。……そうだな、自分。

……だが、刺激が強すぎる……。

何考えてるんだあのじじいども。

「ご主人様ー？」

芽衣はいわゆるベビードール型のメイド服に身を包んで、小首を傾げてわたしを見上げてきた。

その濡れて艶めいた赤い唇に、ちらり覗く可愛い舌先に。大慌てで顔を背けた。

くうっ！

芽衣、君のそれは挑発か！？

挑む気なら受けて勃つ。いやいや、勃つてどうする！

……落ち着け、おちつけ、俺。

これは陰謀だ。爺どもの言いなりになって、愛しい芽衣に襲い掛かってどうする……。

「その。それは……？いつもの服ではないでしょう？」

搾り出した言葉に、きよとん。として、芽衣は両手を横に広げた。

淡い桃色の薄い生地で作られた、一見ふんわりしたミニ丈ドレス。あの布は、生まれたばかりの子羊の、細い毛で織られた、数の少ない貴重な布だ。一見すると絹と見紛うが、列記とした羊毛布だった。

そんな貴重な反物で、なんて淫靡なものを作ったんだ！

・・・あとで金一封だな。

いや、いや。こほん。

「・・・ええと、『羊族伝統衣装で、春先のこのシーズンにはこれを着て、夕刻長さまのところに行く慣わし』だと・・・」

「ありません！ そんな慣わしありませんから！ どんな罰ゲームですか！」

「え。・・・罰ゲームなんですか？ じゃ、わたしの提案はやっぱり認められないということなんですね？」

衝撃うけて落ち込む芽衣に、もっと慌ててしまった。

「あ、いや、違います！（どつちかと言えば罰を受けているのはわたしのような気がします）それにそのドレス、似合ってますよ！（そのまま押し倒したいくらいに）・・・こほん。ああ、芽衣、提案ってどんな提案なんですか？」

しおれた芽衣を見ていたくないから、強引に話を摩り替えた。

顔を上げてくれないか。

まっすぐ見つめるその瞳に、わたしを映して欲しいんだ。

「・・・あの、お花見です。向こうの世界では春のこの時期、満開の桜の下でお弁当食べたり、お酒を酌み交わしたりするんです。馬鹿騒ぎをする人もいますけど、基本、みんな秩序もって、静かに桜を愛でるんです。とてもきれいなんですよ？」

そう呟く芽衣を見て、ピンクの花の精霊なのは、そのままの君じゃないかと思った。

そして、合点がいった。

「その台詞そっくりそのまま長老たちに言いましたね・・・？」  
大きく溜息をついた。

「え、はい。言いました」

「・・・納得しました」

だから「桜」のような、薄いピンクのひらひらなんですネ・・・。  
あのくそじじい。

実にナイスじゃないか。

「・・・良いでしょう。お花見を許可します。しかしその衣装は、わたしの前以外では着てはいけませんよ？」

しっかり釘を刺しておかなければね。

じじいども、こんな淫靡なものを着せて、あとで目にモノ見せてやる。

・・・うまい香り草で良いかな・・・。

「あ、はい。長老様たちにも言われてます。これってご主人様の前でだけ着る物なんですって。約束を破ると大変な目にあうって言われました。でもご主人様、この服、用途不明な切り込みや、開いてちやいけなはずの所に穴開いてたりするんで、ヘンなんです・・・丈も短いし・・・」

屈めないんで仕事にならないんです。

でも、なんでこんなヘンなところ切れ込み入ってるんでしょう？

製造元に抗議しなきゃいけませんかね？

「いえ・・・たぶん、そう言うものなのでしょう・・・（目を逸らし）」

・・・淫靡な恋人同士の為のコスチュームなんですから・・・。

本来の使用方法を知ったら、芽衣はどんな反応をするだろう？

「・・・でも芽衣、二人だけの時はまたそれを着てくださいね？  
長老たちが君の為に準備したものだからね」

「そ、そうですね！ 感謝してます！」

（いや、感謝はしちゃダメだ）

頭が痛いのは、きっと、気のせいじゃない。

\*\*\*\*\*

ともあれ。

芽衣率いる「第一回羊族お花見大会」はこうして開催された。

あんこと、きな粉とみたらし団子は羊族に好評だった。

まさに、花より団子。

その年、山桜の元へ続く山道が整備され、翌年からは各国の観光客も来る、目玉スポットとなる。



羊の国から桜だより（後書き）

・ ・ ・ 峠の茶店に、例の小冊子がおいてあったりして ・ ・ ・ 。  
順調に信者獲得中。

## 羊の国から腐女子のススメ

誰にだってハジメテの衝撃ってのがああるわよね。

それが如何に衝撃的で、魂揺さぶっちゃうかで、その後の進退が変わっちゃうくらいの。

・・・わたしのハジメテの衝撃は、十一の時だったわ。

なじみの本屋さんでふと手に取った漫画本。表紙はいたってノーマルな男女カップルだった。・・・ように見えたただけなんだけどね・・・はああ。

でもね、読み進めるうちになんかヘンだなーって思ったのよ。今思えば、そこでやめときゃ良かったのよねー。

でも、好奇心って奴は一度起きると解決するまでおさまらないでしょう？

あの時のわたしもそうと知らずに踏み込んでいったのよね。

未知の世界へ！

あるシーンにたどり着いたとき、可愛くて口の悪い女の子だと思ってた子が、男の子だと悟ったわ。

あれがイワユル、青天の霹靂だったのね・・・。

そのあとは、？の増産よ。

あれ？

なんで？

どーして？ よ。

何で、男同士で見詰め合って、頬染めあって、抱き合って口付けしてるの・・・？

硬直した指は、脳が指令する行動を忠実に行ったわ。  
本、閉じたさ。

でも、そのうちフラッシュバックするわけよ。眠ったとき、起きたとき、勉強の合間に時折ふつと降りてくるの。あの感覚。

淫靡な、背徳感。

イケナイ事をしている自覚はあったわ。

親に隠れてあんな本に手を出したら・・・戻れなくなると言うのも知っていた。

でも、あの、胸をときどきさせる高揚感。あの味をもう一度、と思っただけ本屋さんへ行ったの。

今思えば、世はまさに、ぼーいずらぶジャンルの確立を祝福し、謳いあげていた。

淫靡で華美で、どこかストイックな陰影を伴う雑誌が、ところせましと置かれていたの！

まさに天国！

一回、転がり落ちると、どっかにぶつかって止まるまで、誰にも止められないのよね・・・。

未知の世界が諸手を広げて歓迎してくれたわ！

でもそこで、わたしは奥の深さを知ったのです……。

ばーいすらぶジャンル、侮りがたし……！

オースドックスな恋愛モノ、リーマンもの、教師モノ、同級生モノ、やくざモノ。

ハードを追求する、監禁もの、緊縛もの、鬼畜もの。

マニアックさを謳うもの、ハーレクインもの、ファンタジーもの、歴史もの、転生もの、童話口調のもの……分類しだすと切がない。

しかもだ！

漫画でビジュアルに魅せるモノがあるかと思えば、文章一本に絞り込んだ読み応えのあるものまで存在するから大変だ！

……通ったわ。

通い続けて、本屋さんじゃダメなんだと気がついた。サークル活動の中で、同人誌を発行している方が多かったの。

でもね、同人誌って普通の本屋さんじゃ売ってないのよ。

同人誌はすごかった！ なんと言うか、濃い？

プロも顔負けの精密な描写！

絵は事細かく細部まで書き込まれている。そう……さいぶまで！

そりゃ、もう髪の一筋まで再現されてる代物だ。

波打つ胸板に流れる一筋の汗や、顎を伝う汗や、にっこり笑った男性が握りしめてる男性の（！）象徴に浮き出した血管の一筋や、ちろりと出された舌先から滴る露までが、綿密に描き込まれていた

の・・・！

・・・これって、汗かしら。

・・・それともなんか違う汁かしら。

同じ「さんずい」なのになんなの、この単語の持つ、度合いの違い・・・！

いけない。

この続きを見てはいけない気がする。

でもでも、気になる・・・。それが腐女子。

恐る恐る、むしろ怖いもの見たさで果敢に続きを読み進み、攻め男子と受け男子の痴態を目を皿のようにして見ていった。

青くなり赤くなり、白くなつては赤くなり、そして悟った。

おそるべし、同人誌！ 見習おう腐女子の絆！

男同士の口付けだけでうろたえていた青いわたしは過去の産物。

今じゃすっかり染め上がってる。

\*\*\*\*\*

「うーん、ここはやっぱり、苦々しげに睨み付けて、そのうち淫靡な快楽に屈して吐息を漏らす、つてのが良いかも・・・」

こっちの構図の方が、いいよね？ と誰にともなく呟いて、芽衣は描きあがった下書きの紙を持ち上げた。

コマ割りも台詞配置もばっちりの漫画の原稿だ。

「熊の左手は、ノルディ様の着衣の中にこう、潜ませて……うん？　こう？　あれ？」

仕方なく鏡の前で全身を映し出して見た。

後ろから羽交い絞めにするんだから、こう、腕が回されて……

ああ、肩口から抱き込む方が良いかなー？

鏡の前で自分を抱きしめるように腕を回す娘の後ろで、ノックの後顔をだしたピンクの毛並みの娘羊が、その場で立ち尽くしていた。

「あれれ？　めりーさん？」

めりーさん、めりーさん、もしもーし？

自分を自分で抱きしめている間抜けなポーズのまま、芽衣がめりーさんを振り返った。

メりーさんは固まっただまだ。

どしたの？　と小首を傾げる黒髪の娘さんと、それはこっちの台詞だと言わんばかりのピンクの娘羊が肩を落とした。

「……最近夜遅くまで仕事をしているようだから、様子を見てやって欲しいと長さまが、仰るから……でも。楽しそうだね、めえちゃん……」

「えへへ。お仕事じゃないの。趣味と言つか、娯楽と言つか……」

真っ赤になつてすまなそうに謝る娘は可愛らしい。

悪気がないのはわかるのだが、でも長さまはこの娘がナニヲシテイタノカが気になるのだ。

きつと扉の向こうで聞き耳を立てているに違いない。

そう思いながら、メりーさんは目の前の娘に向き直った。

「……解ってるわ。めえちゃん監修の娯楽本の作成でしょう？　となりのリリエルが続きはまだかつて騒いでいたものね」

分かっているからなお痛い。

長さまに言いたいと言えないこのジレンマ。

声を大にして言いたい。

この娘はねー、長さまの裸体を描いちゃ、男同士の劣情に焦点を当てた、モノスゴイモンを描いているんですよーって。

・・・言えないけどね・・・。

半ば諦めきつた表情で、娘羊さんは芽衣を見た。

対する芽衣は上機嫌だ。筆の進み具合が良いらしい。（頭の痛いことにね！by、めりーさん）

「そうなの。続きがんばって描いているけど、でも完成度は高い方が良くないじゃない？」

活版印刷はもっぱら童話や昔語りが中心で、口伝でつたえられていたものを形に残すことから始められた。

そっちが最優先だから、今、ぼーいすらぶ分野はお休みだ。ちまちまと木片を彫って印刷するには時間がかかりすぎる。

だから今わたしが描いている物は、文章ではなく、漫画だった。炭の粉を粘土に混ぜて、固めた墨の棒で、線を引き絵を描いている。水墨画みたいなものだ。

これなら一冊、十日位かければできるし、読むのに時間はかからないから、すぐに回し読みが出来る。

回を重ねてなんともう五冊目に突入だ。

毎回ノルデイ様似の美形が困難な目にあっているけど、おおむね反応は良好。

みんなやっぱり美形受けが好きなのね・・・。

でも途中まで仕上がった漫画を見ていたメリーさんが、眉をしかめて呟いた。

「・・・きれいなだけなら、女の方が良いに決まっていますわ。柔らかいし、抱き心地だって良いはず」

「めりーさん？」

「近寄りがたいほど綺麗で、尊敬できて、心酔しきってる、存在感のある男性が、その崇拜ゆえに、崇拜している相手に押し倒される！　ってところに禁断の香りを覚えますのよ。攻略の難しい難攻不落の相手に挑む男の心意気！　男足る者そうでなくっちゃ！」

「めりーさんも、そう思う？」

「当たり前ですわよ！　熊と女神の肉弾戦は、ぜひとも女神に勝利して欲しいですわ！」

だって私たちの長さまが、黙ってあんな熊に押し倒されるとお思いで？

「「否！」」

「長さまは、鬼畜ですわ！　押し倒して嫣然と蠱惑的に微笑んでもらわなければ！　大体あの熊に長さまを御せる力量などございません！」

嫁御の尻に敷かれて鼻の下を伸ばしているそうですもの！

ラグエルさんのお嫁さんは、山羊族稀代の姐御と呼ばれる女丈夫らしい・・・。

猛々しさは男顔負け。女子の憧れの的。

「ふん、ラグエルごときが触れてよいお方ではありませんのよ、おねえさまは！　きつと泣きついたに違いありませんわ！　お姉さまは年下のものを無碍に扱うこともない、凛々しいお方なのに・・・」

「  
メリーさんのお手本と崇められた女性は、どうも、ラグエルさんより年上みたいだ。」

「・・・あの髭は、お姉さまに少しでも近づきたい年下の男の子の気合なのか・・・」

「  
そうと知ったら、今度は、あれだ。」



「下克上って、響きが好き・・・」

熊よ、チャレンジャーとして認めてやろう。（えらそう）  
未踏の大地に挑む挑戦者として、讃える本を書かなきゃ・・・！

それから、新作の批評をメリーさんをお願いしてみた。  
快く引き受けてくれたので嬉しい！  
でも、やっぱり、知らない単語があるみたいで、メリーさんの眉が寄っていた。

「めえちゃん、この、ねくたいってなあに？」

おおっ、ネクタイ！

ないもんね、ネクタイ！

「ネクタイはねー、リーマン・・・サラリーマンっていう職種の方が使用する、仕事着の決めアイテムなんです！ もう、もう、最強のアイテムなんですよう！ 縛ってよし！ 目隠ししてよし！ さらに上級者になると、素肌にワイシャツ、解けかかったネクタイのみという、無敵のお色気をもし出したり、果ては勃ってる一物の根元を縛ってイケナクさせる拷問アイテムに仕立てたりという腐女子的最強アイテムのひとつで・・・」

頬を真っ赤に染め上げながら、説明を始めた黒髪も麗しい娘。

その状況を想像したのか、やがて両手で頬を押さえると、メリーさんの目の前で嬉しそうにくねくねし出した。

ばら色のほっぺに、艶めいた黒髪が色を添える。

だが、その娘の紡ぎだした言葉の羅列に、メリーさんが血相を変えた。

ここぞとばかりに、常に抱いていた疑問を口に出す。

「・・・めえちゃん向こうに恋人いた？」

「へ？」

「見たことあるの？　そ、それとも、し・・・したことあるの？」  
ピンクの娘羊の頭の中はすわ一大事！でいっぱいだった。

どうしよう！　恋人がいるなんて言われたら！

長さまになんてご報告をすればいいのだろう！？

だいたい漫画を見せてもらってから、付きまとっていたこの疑惑。  
だってどこの世界に、処女が処女のまま、こんな大胆なものを  
描けるのか！

うぶそうなめえちゃんに、まさかの恋人疑惑浮上！？

長さまが、心痛で死んでしまうわ！

冗談じゃないっ！！！！

「へ？　へ・・・な、にやにやにや！　ないです！　見たことも  
したこともないです！」

ピンクの毛玉が逆立って、勢いそのままに迫られた娘は、言葉に  
含まれたものに慌てて手を振り始めた。顔が、赤い。

「うそおっしゃいっ！　ここ！　この絵！　しかもここ！　この、  
この、うにやにやの詳しい描写と言い、形状と言い、見たかもしく  
は味わったことがあるのか明白！」

「ないって！　なにその断定口調！　しかも、味わつつひいひい  
いっ！　ち、ちがう！　その、その」

慌てた拳句そんなことを口走った芽衣だったが、間違いではない。  
目を白黒させながら、詰め寄るメリーさんを見上げた。

「わたしは未体験です！　でもそこを補って余りある、好奇心で  
掘り下げてきたの！　未知のゾーンは、想像の賜物なんですようっ  
！！！！あとは、先人の描いた代物を舐めるように見込んだ結果と、

先輩の仰った「まつたけに思いを馳せよ」という名言を胸に抱えていた次第で！」

「……まつたけ……？」

それって、なに。

こくこくこくと頷く娘の頬は、恥じらいに真っ赤に染まっていた。もじもじと目をそらす。

「ええと、ええとね、は……恥ずかしながらこの岸　芽衣。恋人いない暦〃年齢でして。で、まつたけってね、向こうの世界の高級食材で、あるときお母さんが清水の舞台から飛び降りる気合で買ってきた人生初の国産マツタケを前に、先輩のお言葉を思い出したのです……男の象徴はマツタケよ！ってのを……で、珍味を前にデッサンしました。

そりゃーもー、いろんな角度から。そしたら、その肉感的なところとか、肉感的なところとか、隆盛なところとか、質量的にも腐女子仲間に絶賛されて……ほ、ほめられて、のせられて……」

精魂込めて描きました！

男性の象徴を！

「……めえちゃん……。想像でここまでの描写を？」

いつそ、あつぱれ。

「……え、えへ」　（至極嬉しそうな笑顔）

「……（恥らう場所がちがう！）……うん。まあ、わかったわ……」

がつくりと力を落としたメリーさんの姿があった。

でも良かったのか、これで。良かったんだろうな、これで。これで初体験済んでますなんて暴露されたら、いかな長さまで立

直れるはずがない・・・。

なんて考えていたメリーさんを尻目に、芽衣は嬉しそうに絵を指し示していた。

「えへへ、でもね、これいいでしょー？ 男の人と付き合ったことがない子でも、これでシミュレーションすれば、恐怖半減！」

「・・・それは、確かに。でも本当に気持ちよくなれるのかしら・・・」

「え、なれますよー！ きつとね！」  
悶えつつ頬を染める少女ふたり。

「・・・くうううう、一回！一回で良いからご主人様を目隠しして、はだかにしてみたいなあああ、抗うご主人様を押さえつけて！、もろ肌脱がすより、かた肌をこう、さらけ出させてさー」

わたしがそう言いつつ、右肩を出したもんだから、メリーさんが慌ててしまった。

「めめめ、めえちゃんっ！ はしたないわよ！」

「えええ、私なんて別に、ご主人様の色気に比べたら！ 花魁と下女くらいの格差が！」

「おいらんの意味もわかんないな・・・。でもめえちゃん、素肌を出しちゃいけません！ 毛皮がないんだから、そんな無防備に肌をさらけ出していると、勘違いしたばかりに襲われるよ！」

「わたしを襲う気力があるんなら、ぜひともご主人様を押し倒して欲しいです！」

隠れまっちょを押し倒せる男気に溢れたホモっていないのかしら。目を皿のようにして探したけど、現実、さわやかまっちょまんは皆さん、妻帯者でした。

「押し倒す適任者がいないのが難点ですねえ・・・。押し倒せそうなさわやか元氣系も、はかなげ美少年系も、強氣子犬系も、気ま

ぐれ子猫系も、いるにはいるけど・・・いないんだもん・・・」  
ええ、年齢でアウト。

小さきものは本当に小さくて、その愛らしさを目にすると・・・  
いくらわたしが鬼畜ボーイズラブ命って言っても、気がとがめます。  
情が移ったのよね。あの子達が鬼畜ご主人様に襲われる、と考えたら・・・無理！ 無理無理無理、無理いっ！！！！そんな、可哀そうなことができるかああああ！

あの子達はわたしが守る！

ご主人様の毒牙にかけてたまるもんか！！！！

・・・だからご主人様、安心して遅しい殿方に押し倒されて知らない扉を開けてください！ あの子達の貞操の為に！

そんでその一部始終をリポートするのです！

遅しい殿方に押し倒されて喜びに花開くだろうご主人様を、影から見守りたいです！

あら、決して覗きではありませんよ？

処女ならぬ処男を散らす様を克明に書き記すためですから！ 後学の友のために。

「アイテムとしては銀縁眼鏡代わりに、モノクル発見しましたし、鬼畜男子に似合いそうな白衣も作りました。ネクタイだつて各種製造完了してます！「めえちゃんつめえちゃんつ」縄だつて、荒縄、なめし皮、絹布、木綿と各種そろえました！」

なんか、メリーさんの声が間に入ったようですが、待て同志！

「・・・あとはご主人様を押し倒してくれる飛びきりたくましい殿方を発見するのみです！」

「・・・殿方・・・？」

「はい！ ナイス組み合わせといえば、ラグエルさんだったんですが、あの方お嫁さんを迎えるそうですし、高砂やくですので、省きます！ でもでも、探せばきつと、ご主人さまに似合いの隠れまっちゃんか、はかなげ美青年と見せかけて、実は腹黒鬼畜系がいるはずだ、と、おもおおお……め、めりーさん、明日の仕事は何でしょう？」

夢見るように明後日の方を見上げて語っていたわたしも、台風襲来に気付いたので、さりげなさを装って話を変えてみたりなんかしましたが……。

……遅かった、ようです……。

開け放たれた扉には、優美な、あまりにも優美な羊族の若き長が立っていました。

気のせいだね、ブリザードが見える。

………。

ええと、前略。

はるか異世界におられるお父様、お母様。

……突然ですが、芽衣、ぴんちです。

## 羊の国から腐女子のススメ（後書き）

「冷気が一瞬で部屋を埋め尽くしてね、フリージングってこういうことを言うんだなあって思ったの！白銀のノルディってあだ名は伊達じゃないんだね！ものすごい冷気だったよ、文字通り、氷の微笑！」

凍ってしまつて動けなくって、あの青い瞳に見つめられてね、口元が開くたび、白い息が吐き出される感じがしてさ。実際温度何度下がったのかなー？氷点下だったと思うよ？雪女って本当にいたんだねー・・・。

しみじみと呟いた。

「長さまは雪女じゃないけど・・・」

「それくらい迫力あつて、それくらい美人だったって事！」

## 羊の国から、衣替え（前書き）

・・・作中変態チックな言葉がもろに炸裂してますが、別にそんな描写はないです・・・。



## 羊の国から、衣替え

拝啓。

はるか異世界に居られます、お父様、お母様。いかがお過ごしですか？

もう、初夏の頃ですね、新緑の緑の柔らかさが目に浮かびます。

日に日に暖かくなって、過ごしやすい季節になりましたか？

そう、雪深い山間のあの町にだって、もう初夏の気配は押し寄せてますでしょうね。

冬物は仕舞い終わったかしら？

もう、冬物着ている人はいませんよね？　ね？　ね？

ブ厚くて重い外套脱いで、お出かけしようよと、往年の飴玉隊の三人も言っていましたもんねえ……。

あんなもん、着てたらいくら初夏の心地良い風が吹いても、一向に気持ち良くなかなりませんって！

……やはり、これは大問題ですね……。

あ、なにが問題かって？　いえいえ、こちらのお話なのであります。

主に、わたくしの精神的苦痛を払拭するために必要な活動予告なの

ですよ！

目指せ、クールビズ！ 芽衣は快適なひつじライフを極めるために、  
いっそう努力します！

・・・ですから、ご両親様はご心配なさらぬよう。

遠い異界の片隅で、切に願っております！

\*\*\*\*\*

「むう、問題です。大問題です。美形腹黒鬼畜攻めは正義な位、大  
問題なのです！」

「・・・わかった。わかったから、戻ってきなさい、芽衣」

今日は麗らかないい天気。

風薫る五月。生命は躍動をはじめ、伸びやかに己の人生を謳歌して  
いた。それは、このひつじ族も。

この時期一番のイベントが開催されるこの月、ひつじ族に名を連ね  
る者たちはどこかうきうきとしていた。

そう。

芽衣が訪れる前までは、私だってこの時期を心待ちにしていたもの

だ。

文字通り、血湧き、肉踊る、ひつじとして生まれたものなら感じるだろう、生命の躍動を、種の神秘を実感できるこの珠玉の時期。

だが、いまや苦痛にしか感じられない。

あの胸躍らせる躍動の 때가、苦行にしか感じられなくなってしまった。

・・・毛狩りシーズンの訪れ、だ。

大きな鋏を手に、きらきらした瞳で芽衣がノルディを見上げた。

・・・どうやら、刈る気満々のようだ。あれだけ、結構ですと言ったのに・・・。

羊族の上位種、白銀のノルディはどうしたもんかとため息をついた。

毛刈り。それは、羊にとって恍惚の時間・・・！

刈り手に身を預け、身を投げ出し、もうどうにでもしてえな状態でしなだれかかる。

分かる。分かるさ、わたしだって羊だからな！

あの開放感、あの清涼感は、金では買えない。

重いコートを脱ぎ捨て走る、あの開放感！！・・・いや別に私たち羊族は露出狂ではない。だが、生命に刻み付けられた、羊の性が、

開放感を喜ぶ自分自身を抑えきれないのだ！

あの姿を、そのときの自分を、芽衣に見せたくない一心でひたすらに隠してきたこのイベント。

芽衣が館にやってきてから、その存在を知られてはならんと言明し、徹底して秘密裏に行ってきた毛刈りイベント。

・・・毛刈りの翌日、芽衣の「あれ？　なんだか、今日はヤギさんがいっぱいですねー」に、知らぬ顔で相槌だつて打った。

な、の、に。

「あんの、くそじじい・・・」

白銀のノルディは、ぎりぎり歯軋りしながら恨み節を呟いた。

締め上げてやろうか。

敬老精神も吹っ飛ぶ、爺の仕打ちに、ノルディは心底怒っていた。  
あんなにあんなに、隠してきたのに・・・！　バラしやがってくそじじい！

「なあにが、魅惑のつるつるタイムだ！・・・刈っちゃいけない際きわの際まで丸刈りにしてやろうか・・・」

・・・白銀のノルディは、おせっかい爺たちにとつとつ殺意を抱いた。

・・・まあ、そんなこんなで、愛しいあの子に、だらしなく寝そべ

り、恍惚の表情を浮かべる自分を見せたくないばかりに、今年の毛刈りをばつくれようと思っていたノルディだったが・・・、芽衣のきらきらビームに阻まれていた。

そつと目を離す。

（とことことこ）じー・・・。

向きを変えてまた目をそらす。

（とことことこ）じー・・・。

ああ・・・その期待に満ちた眼差しに、負けてしまいそうな自分がいるが、律するんだ、俺！

愛する芽衣にあんな姿を見られて良いのか、俺！

なんたつて。

毛刈りスタイルってば、羊の姿は大の字万歳。

そう、大の字で、ば、ん、ざ、い！

ノルディさんの背中をつめたい汗が通っていった。

しかも、しかもだ。むくむくのうちはまだ良い。

羊毛に阻まれ地肌はまるで見えやしないのだから。

だが、ひとたび、つるりと毛皮を剥かれたら。あら不思議、さつき

までここにいた羊ってヤギだったのね、と錯覚することもあるくらい貧相な姿になる。

しかも、羊毛を刈られてる間、無防備にも程があるって位、股か（ぴぴぴぴぴー！ レッドカード！）まるだし。

ま、る、だ、し（？）なんだよ、諸君！

「・・・何が悲しくて愛しの芽衣との初めての共同作業が、剃毛って・・・」

なんて高度な羞恥プレイ！

・・・しかも、剃られるのが自分。

ずずずずずずずずずんんん、と落ち込んだ。

逆でしょう、普通！

妖しく微笑み、芽衣の羞恥を煽りつつ、大人の余裕で芽衣を大人にしてやるのは私の仕事のはずでしょう？

何で、隠しておいたイベントがオープンになっていて、私の担当が芽衣なんですか・・・陰謀？ 陰謀ですか、恨みますよ、長老・・・。

「ご主人様、毛刈りって羊さんじゃなきゃ、できませんよう？ だつてわたくし、落人ですから、刈れる様な毛皮姿になれません」

「・・・ええ・・・そう・・・そうですね・・・」

なんだか、ノルディは男の純情を投げ捨てたくなった。

\*\*\*\*\*

「えっと、で・・・では、参ります。ご主人様、痛かったら左手上げてくださいね？」

どこの歯医者と自分に突っ込みいれてみたが、ご主人様は疲れているのか無口無言。

どこの武士のように眉間にしわをこさえながら、雄雄しい獣の姿勢になってくれた。

爺様たちが、周りでやいのやいの言っているが、昨日までにみっちり受けた講義を思い返した。

怪我をさせないように丁寧に、不自然な体制を長く取らせないためにも手際よく。

まず、ご主人様の背後に立って、前足を抱えあげた。腰を押し付けて胸を張るように背中を支えると・・・あら不思議。

羊さんの直立スタイルの出来上がり。ここから今度はそつと尾てい骨をおろして行けば・・・両手両足前に習いの羊さんの出来上がり！

おし。ここまでではうまくいった。それではこれからが本番です。

「ご主人様、わたくしごときの拙い手で申し訳ありませんが・・・失礼いたします」

大きな鍔を手にとって、そっと白銀の毛並みに沿って鍔を入れた。

・・・一心不乱に鍔を使い、ふと気がつけば予定よりも時間がおし  
ていた。

でも、ご主人様はじっとしてくれたままだ。ありがたいけど、それが却って自分の未熟さを突きつけられたようで、申し訳なくなる。

最後の最後まで身じろぎひとつせず、じっとしてくれていたご主人様が、私が腕を止めたのを感じたのか、ひょいと起き上がった。

無言で青い瞳が私の瞳を覗き込んでいる。

その瞳がそっとそらされて、私はあせった。

ザンバラの虎刈り姿になってしまつて、わたしのあまりの下手さにご主人様が呆れたんだ！

そう思ったら、思わず涙がにじんだ。

あわてて手を伸ばし、ご主人様の体にしがみついた。

「・・・ご、ご主人様、ごめんなさい・・・！ 練習したし、みんなも上達したから大丈夫だって言ってくれたからって、ご主人様の毛を刈るなんて、私には早すぎました！ やっぱりまだまだでした」

そしたら、どこからか啞えて来たシートに、頭を突っ込んでみても



ぞしていたご主人様が、「立ち上がった」

えぐえぐしながら見上げる先に、髪がてんでに短くなった、ご主人様のお姿が・・・！

優しいお顔で微笑んでくれて、

「芽衣。来年もまた芽衣にお願いしますね。良いんですよ。だんだん慣れてくればいいんです・・・」

そう言つて、女神様のように慈愛に溢れた微笑を見せてくれたので、私はまたも泣いてしまった。

\*\*\*\*\*

「ご主人様、来年はもっとちゃんと刈れる様に練習します！」

そう言つて泣き笑いをした彼女は、あいも変わらず、鈍くて可愛い。

真剣に仕事にまい進する彼女は、私のだらしない姿を見ても眉一筋も動かすことはなかった。

・・・それどころか。

彼女の胸に抱かれて、彼女の全身の動きを肌で感じられて。

芽衣の真剣な横顔、繊細な指先が、私のわき腹をなぞり、全身くまなく撫でさすられて。・・・いや、毛を刈っているのだから当たり前

前なのだが。

ほう、と切ないため息が口をつく。

ただでさえ、恍惚のときなのに。

芽衣の指はそれ以上の快感をもたらした。

「・・・癖になってしまいますね・・・芽衣」

黒髪の、柔らかい娘を抱き寄せて、毛を刈るというイベントの重大さをどう伝えようかと悩んだ。

これはそもそも、夫婦でないと成し得ないイベントなんですよ、と言っべきか。

将来を誓い合ったものにしか、その身を任すことはしないのですよ、と言っべきか。

白銀のノルディは、思案する。

羊の国から、衣替え（後書き）

きつと、勃つてたとおもう長様の一物。でも芽衣は一生懸命。

羊の国から狼になろう

腕の中でまどろむ娘。

「ご先祖様、もういい加減この娘、食ってもいいですよね？」

毎度毎度毛皮に頬を染め、顔を埋めてはぐりぐりと懐く。

「……く！ 芽衣。顔を埋める場所が良すぎ……いや、悪すぎる。」

理性で押さえ込むにも、そろそろ限界だ。

「この滾る思いを形にして、君の柔肌で静めてもらいたいのだが……」

「くう」

愛しい娘は夢の中。

拷問か、拷問なのか、これは。たまに股k……（こほん）で懐かれるのが困る。居心地のいい場所を探しているのだから、時折頭をぐりぐり……するのが困る。困るのだ。

「……………」

頭の片隅で悪魔が囁いた。

【男の腕の中で毎晩寝ているんだ。その気があるに違いないさ、

食っちゃえよ】

悪魔め！

可愛い芽衣を毒牙にかけていいとでも！？

【食わなきゃ誰かに食われるぞ】

そんな不埒者はこの里にいない！

【・・・そうかな？】

「んむー」

ころころと転がってきた君が、わたしの毛皮にすりすり懐いた。

・・・ふと微笑が浮かぶ。

愛しい芽衣。

いつかその瞳に、獣姿ではない私を映して、その頬をばら色に染めて欲しい。

「んー、んん？」

芽衣の眉がより、むくつと身を起こしたのはその時だった。

「・・・芽衣？」

珍しいな、起きたのか？

そう続けようとした頭は、次の瞬間白く染まった。

・・・あまりの衝撃で。

「・・・ごしゅじんしゃま、これ、じゃまれます」

ふわふわした眼差しで、寝ぼけているのが丸分かりの顔で芽衣が握り締めた。

「むー、これじゃまれます、じゃまー」

硬くてごつごつしてて、しかもなんか熱くてえー、なんれこんな棒切れベッドに入ってるんれすかぁー。

・・・がしつと握り締めて、右に左に縦横無尽。

何か言うべきなのでしょうが、声を抑えるので精一杯です。それ以前に軽いパニックに陥りました。

「あんみのぼーがいれすー。めいは、だんここうぎしましゅう・  
・ぐう」

しまいに、握り締めたまま眠ってしまった。

・・・冷や汗が、出た。

その手を外すのにどれほどの理性を総動員したか。

今宵の私は、褒められていいと思う。

\*\*\*\*\*

そんな毎日が続けば、寝不足にもなる。

そして元凶が心配して看病に勤しみ、また寝不足になるのだ。

「・・・くそじい・・・」

最近のノルディさんは、敬老？ なにそれおいしいの？ ところであそこにたむろする、不良老年、排斥していいよね？・・・系の物騒な思考回路しか存在しない。むしろそれ以外許さない。

「ご主人様！ 急に動いちゃだめですよ！」

「・・・芽衣・・・それは、なに」

「エ、爺様方がプレゼントしてくれた、看護師の制服です」

ピンクの超ミニナース。

甲斐甲斐しくご奉・・・仕事中。

頭が痛い。

「ご主人様、香り草を食べやすく煮てポタージュにしてみました。  
！。はい、あーん」

「・・・」

にこにこ笑顔でスプーン差し出され、期待に満ちた慈愛の顔で見られれば、白旗あげる他はない。

扉の向こうでうずうずしている爺どもを喜ばせる気はないのだから。  
ないのだが！

そつと、口をあけた。

しかし、おせっかい爺ども。

どこで探してきたんだ、この衣装。

芽衣のなけなしの白乳が、よせてあげて、みごとな隆起を表していた（職人技だな）。

上乳がつやつやしているのが丸分かりだ。顔を埋めたらふにゅっとして心地良いだろうな……。

長ミミのスカートからは、太ももの艶やかな滑らかさが（触らずとも分かる！）垣間見える。眼福だ。

腰の辺りは程よくくびれ、腰から尻への滑らかな隆起が……ああ、触りたい。

撫でて、揉んで、直に触れたい。

舐めて、噛んで、くすぐりたい。

「ご主人様？」

「……ああ、芽衣……これは、反則です」

理性を試すのは、もうこれぐらいで勘弁して欲しいのです。

やわらかいナース姿の娘の腕を、握り締め、体勢を入れ替えてベツドに押し倒した。

「うわっ！ ご、ごしゅじんさま？」



「今日は、このまま、添い寝してもらいますよ？ 私が心配なんでしょう？・・・では、全快するまで一緒にいてもらわなくてはね」  
朝も昼も、もちろん夜も。

耳元で呟けば、娘がひゃっと首をすくめた。・・・ああ。耳が感じるんだ、とほくそ笑む。

それから、真っ赤に染まったその頬に、くちびるをおとしながら、芽衣の唇に沿って親指をすべらせた。

その刺激に顔を真っ赤に染め上げ、私の視界から逃れようとする娘。

芽衣に、ようやく男として見てもらえた歓喜に胸を震わせた。

・・・これからだ。

君を捕まえて離さない。

「私が良いと言うまで、一緒にいるんですよ？ どこにも・・・誰の元にも行つてはいけません」

その言葉に、娘がしばらくして、うなずいた。

もういいなんて、絶対に私は言いませんけどね。

ああ、狼が獲物を見る気分とは、こんな感じなのでしょうか。

確かにこの感覚は、癖になる、と思うのです。



## 羊の国から狼になろう（後書き）

でも長様、狼ぶつてても、羊ですからー・・・。  
握られてーコントロールスティックよろしく動かされてー。  
泣いて良いかも。

羊の国から、狼になりたい

「・・・もういつぞ、獣姦でも良いか」

どこか遠い眼差しで彼方を見ていた旧友、羊族の上位種、ノルデイがポツリ呟いた。

ぶふーっ!!!

「な・・・な、な・・・ノルデイ!」

旧友と嗜んでいた飲み物を、山羊族の上位種ラグエルは一気にふきだし、叫んだ。

少し器官に入ったかもしれない。げぼげぼと咳き込みながら、ラグエルは少し前に聞いた言葉を反芻した。な・・・なに言ったこいつ。今なにを!

目を白黒させて見た先には、麗しの美貌の主、羊族の若き長がいる。

・・・明日の婚礼に参列する為、山を越え山羊族の地まで来ていたノルデイは、山羊族の長ラグエルと、食後の軽い酒を楽しんでいた。

しきりに咽ているラグエルを流し目で見た後、ノルデイはため息をついた。

「・・・うるさいな、ラグエル。らぶらぶの貴様には分かん苦悩だ。大体同族と婚姻を結べたのだから、私とはスタートラインさ

え違う。むしろ貴様にとって獣姦はノーマルプレイだろうが」

白銀のノルディは優美な眉目にしわを寄せ、苦悩の色を見せている。苦悩する若き長は憂いを秘めて限りなく美しかった。

・・・が、紡がれる言葉は凶器。

「お・・・落ち着け、ノルディ。あの小猿は、そもそも人族だろうが！　じゅっ・・・獣っ！？　ダ、ダダ、ダメだろうが、貴様！　泣かれて嫌われるぞ！」

そもそも落人はデリケートな生き物なんだから！

出産の折は、精神面のサポートが色々大変だったと、各国の長が言ってたぞ！

・・・その話を聞いて、お荷物（落人）が落っこちてこなくて良かったと思ったことは内緒だ。

焦ったラグエルに、ノルディは冷めた眼差しをよこした。

じっと思つめて、しばしの後、ため息をついた。しみじみと。

「・・・芽衣は、羊ラブなんだよ、ラグ」

明けても暮れても羊・羊・ひつじ・だ！　子羊、娘羊、の次くらいに私なんだよ。それでも人型だったら爺の後に回されるんだ・・・。

グルーミングの順番に物申す！　とばかりに、拳を握り締めてプルプルしたノルディだった。

そんな常になく煮詰まった感じのノルディに、ラグエルは恐る恐る腕を伸ばした。

「お、おい。酔ったのか？　酔ってるよな。酔ってると言ってく

れ」

「酔ってなどいない」

不穏な空気をかもし出す、白銀のノルディにラグエルはたじたじだ。しかもそのノルディは、ラグエルの戸惑いに気づいてはいても、自分の苛立ちを発散させるので手一杯だ。

・・・まあ、いつもは長として皆を率いなければならない重責にある二人だ。

旧友で悪友のラグエルの前、さらに酒が入ったからこそ、零れ落ちた本音だろうが、いかんせん。

内容が痛かった・・・。

「・・・そうさ、いつそ人型より、羊形態の方がよろこんで身を任してくれるかもしれないな・・・」

・・・当のノルディ、酔ってはいないが、もちろん、自棄だ。

「・・・ふふ。ふふふ・・・（遠い目）。毛皮に魅せられているうちにのしかかれば良かったんだ・・・」

芽衣のピーに滾るピーを突っ込んで、あんあん言わせりゃ済んだんじゃないか？

今じゃすっかり安心しきって、同じベッドで寝る始末。どーすりゃいいんですか、この滾る思いの行く末は！

ああ・・・。

「狼になりたい・・・」  
がつくし

「お、おおお落ち着け！ お前、俺を祝いに来たんじゃないのか！ それとも愚痴を言いに来たのか？」

花婿は、独身最後の夜を旧友との昔話に費やすつもりだったのに、なぜか、一本切れた風情の友人を、いなすために汗をかいていた。

オカシイ。

なんか、立場が違う。

やっかみを受けながら、酒を酌み交わし、恋人の惚気をきかせて羨ましがられるはずなのに、なんだこの仕打ち……！

「……幸せそうに鼻の下を伸ばしているから、いやみのひとつも言いたくなるんですよ。ええ、腹の立つ……リエル女史に嫌われる！」

リエル女史の目が覚めることを、切に祈りますよ、私は！

「ノルディ！」

「……ああ……そう言えば、芽衣に頼まれてましたね……。まずはそのうっとうしい髭、そり落とすか……」

青い瞳が底光を見せる。……うっそりとノルディが立ち上がった。

無駄に威圧感が漂う。

ラグエルさんたらたじたじだ。

「……つるつるにしてやりますよ。……私が芽衣につるつるにされたくらいにね……」

「おまつ！ 何の恨みがっ！」

「・・・おとなしくなさい」

ソファに腰掛けていたラグエルに、押し掛けて押さえつけたノルディが、妖しく笑った。

・・・そのときだっ！

どかあんんっ！　だだだだだっ！　がこがこがたがたっ！

ものすごい音が響いた。

一瞬の沈黙の後、

「あた、いたた・・・」

「あらやだ、めえちゃん。だいじょうぶ？」

「や、やあん、私としたことが・・・！」

ピンクの髪の娘と黒い髪の娘が、踏み倒した扉の前でじたばたしていた。

「・・・メリー？　芽衣？」

・・・なにをしてるんですか？　ノルディが呟いた。

わたわたと立ち上がり、スカートをばむばむした娘達がとびつき



りの笑顔をふりまいた。内心はどうあれ、とびきりだ。

「ご、ご、ご主人様！ え、と・・・」

「あの、明日の打ち合わせをしておりますで、その・・・！」

「し・・・失礼いたしましたあつ！」

慌ててドモる芽衣を尻目に、メリーさんが慌てて部屋から走り去った。それはもう見事な逃げっぷりだ。

後に残された芽衣も、娘さんが走り去った扉と、ノルディたちを見て、おろおろすると、がばっと頭を下げた。

「あの、そ、その・・・どーぞ、ごゆっくりiiiiiiiiつつつ  
！」

ドップラー効果で声が彼方に消えていった。

「・・・？」

「・・・なんだ・・・？」

後に残されたのは、ソファの上で首をひねる羊族の長様と、山羊族の長様の二人だった。

だが、客観的に見て。

ソファに身を投げ出したラグエルさんに押し掛かり、ラグエルの万歳両手を片手で拘束し、あまつさえ彼の体を膝の間できっちりと抑えていたノルディのさんのお姿は。

腐女子的には、脳髓直撃の「美形鬼畜言葉責め男子」だった。（

いやまだ責めてない。」

「あいつら、いったいなににきたんだ・・・？」

「・・・いや、明日の花嫁の、付き添い担当なんだが・・・」

ソファで呆然と呟いたラグエルに手を貸して、ノルディはそのままラグエルを引き起こした。

なんだが、考え込んでるだけ損な気がした。芽衣は相変わらず芽衣だし。

「・・・なんだ・・・まあ・・・手がかかりそうだなー・・・小猿なだけに」

「小猿ではない。芽衣だ。だが名を呼ぶのは許さん。・・・ふん、貴様よりは望みがあると思っていたんだがな・・・。なんとって、リエル女史だ。さて、どうやって落とした。泣き落としたか」

「・・・ん。まあ・・・泣き落とした」

我に帰ったノルディさんとラグエルさんの恋話はその夜遅くまで続いた。

\*\*\*\*\*

婚礼は厳粛な中に華やかさを含ませた、新しい風を感じさせるものになるだろう。

色とりどりの花に、飾り付けられたお屋敷の広間に、招待された

ものたちのため息が聞こえる。

山の中では身内だけの素朴な婚礼が主流だったようだから、これは大きな変化だろうと芽衣は思う。

婚礼の部屋に入ると目に飛び込む、細長い真っ赤な織物が鮮やかだ。

赤い絨毯の先に、山羊族の祭壇を飾りつけてもらった。初めての試みでみんな戸惑っていたけど、イラストを描いて見せたら納得してくれた。後は簡単だ。絨毯をはさんで、両脇にいすを並べて、親族の席を作り、絨毯側には花束とリボンを飾った。

本当は祭壇の上に、大きな十字架がかけられるはずなんだけど、そこには山の神様のモニュメント。

大きな羊さんのタペストリーを飾った。そのすぐ下に宣誓台。両隣に燭台。

向こうの世界の結婚式の様相を話したら、それでは、私の仕事は重大ですね。とノルディ様が笑ってくれた。だから、出来ると確信した。

精一杯祝福しましょうね。リエル女史は祝福されて当たり前の方なんだから。とノルディ様はにっこり微笑んでうなずいた。

・・・ノルディ様は今回、祭壇の前に立つ、羊族山羊族すべてを代表して祝福を授ける、重要な役割だ。ラグエルさんの頼みにノルディ様は二つ返事で承した。それからはこの日の前後を空けるため、仕事を寝る間を惜しんで片付けた。

「これが、バージンロードって言っんです」

祭壇の前で、ラグエルさんは立って待つんですよ。

そこでこっちの扉から花嫁がお父さんに手を引かれて入場するんです。

でも花嫁さんには親御さんがいないから、マリーさんと私が付き添いになるんだ。

「ここを一步一步歩いて、花嫁は花婿のもとに歩いていくんです」

絨毯はこの日のために芽衣たち羊族の少女が織った絨毯だ。処女の娘が織った繊細な織りは、お金だけでは手に入らない。でも誰もが織りに混ざってあつという間に織りあがった。

「リエル姉様を最高の花嫁に見せます！」

羊族の娘達は憧れの山羊族の女傑に、捧げる貢物、ということ盛り上がっていた。

山羊族の若き長が、花嫁となる娘を連れて羊族の長の元を訪ねたのは、かれこれ一年も前のことだ。圖案化したタペストリーを作って欲しいと頼まれた。羊族、山羊族の昔からのしきたり。

嫁ぐ娘の幸せを祈って一年も前から準備するのだ。

糸を染め、紡いでは、圖案を悩み、一織り一織り心をこめる。

好きな花、好きな鳥、好きな色、花嫁に似合う色、柄、組み合わせてそれは出来る。

世界でたった一つの織物。

花婿から贈られるそれ。

・・・山羊族屈指の女丈夫リエルは、ラグエルが長となるまで、山羊族を率いてきた女首領だそうだ。

まだ頼りないラグエルが、長として立てるよう陰になり日向になり支えてきた赤い髪の乙女。

無数の傷を衣に隠し、領地の民を守りぬいた武勇の人。里を守ることに必死で、気がついたら婚期を逃していたラグエルさんより九歳も年上の上位種のお姉さん。

始めて会った時は右額に刻まれた大きな傷が痛々しくて、驚いたけれど、その傷を愛しげに撫でながら、リエルさんは笑ったのだ。ラグエルさんと視線をあわせ、困ったように、でもほのぼのと笑ったのだ・・・。

「・・・体中傷だらけで、顔にも大きな傷が残ってて。別の娘を選べと散々言ったのに、こいつときたらちっとも人の話を聴かないんだ」

と、リエルさんが困ったように笑った。

その傷がいいんだ、とラグエルさんは言い切った。

「この傷を誰より愛しているんだ。柔らかい白い手の女より、リエルの硬い手のほうが、優しい言葉より、リエルの容赦ない声の方が万倍も好きだ」

まっすぐ見つめて言い切った若い長の姿を見て、誰もが見られる花嫁を演出しようと思った。

風当たりは強かったそうだ。

若い長をたぶらかした女狐と呼ばれたこともあったらしい。女の

人を侮辱するなんて許さない。

鼻を明かしてやろうよ、といったら、リエル姉様、気後れしがちで困ったんだ。

「・・・ごつごつしててちつとも女らしくないだろう？ 腕だつて足だつて、顔つきだつて凛々しいと言われることはあつても、綺麗だと言われたことは無いんだよ。・・・大体この体格では、入るドレスなんか無いだろう？」

レースやフリルみたいな、女の子然としたカッコウなんか、もう随分と取ってないんだ。

似合うはず無いからね。

そう言つてあきらめたように笑う姉様を見て、私とメリーさんは奮い立った。

「マイナス数えてても良い事ないんですよ！ 良いところをうんと伸ばしましょ！」

そうさ、見せ方一つで女は変わるんだ。

「姉様はごつごつしてるつて言うけど、無駄な贅肉が無いつてことです！ それつてスレンダーつて言うんですよ！ 立つて見て下さい。ほら、とっても姿勢が良いでしょう？ 立ち姿が美しいんですよ。スレンダーで出るとこ出てる姉様には、ごてごてしたドレスより、シンプルなラインのドレスが似合います！」

そうつた私に、メリーさんも同意した。

「まかせて！ とびきりの綺麗な花嫁さんにしてあげる」

でも、本当は着飾らなくてもリエルさんはきらきらしてて、綺麗なだ。

「・・・いまだに反対する馬鹿な親族が多くて、困るんだ」

ラグエルさんの眩きも後を押した。とびきりの花嫁を、見せてやるんだ、そのうるさ型の山羊たちに！

「熊は熊らしく、どーんと構えてなさい！」

バシツと背中をたたいたら、ラグエルさんがよろめいた。

「っなっ！ 誰が熊だ、誰が！」

「うっさいわね！ むさいその髭そりなさいよ！ 花嫁の隣が熊男じゃ、ますます美女と野獣だわ！」

「こ・・・この猿！ 貴様の腕は確かだと皆が言うから、任せるんだからな！ そこ間違えるなよ！」

「分かってんわ！ まーかせなさいっ！」

どんと胸をたたいて、咽たのは秘密だ。

何より、熊は敵だが、リエル姉様には味方したいんだから！

\*\*\*\*\*

羊の国は織物の国。

取って置きの子羊ちゃんの毛を紡いで、つやのある、薄い薄い反物を織った。目をつめてテロンとした手触りのしなやかな織物。これで体の線を出すマーメイドドレスを作る。

初めてのドレスはメリーさんも興味しんしんだった。

「すそを広がらせるのね？」

「そうそう。こう、ドレス自体がお花のように」

「これぐらいかな・・・もつと？」

羊族の娘さんたちも、真剣そのものだ。みんな必死で針を動かした。

リエル姉様は鍛えていた武道派だっただけ、鍛え上げられた体がすばらしい。筋肉質を隠すより、薄い生地でまねの出来ない肉体美を前面に押し出せば、うつとりするだろうと思ったんだ。

案の定、シンプルな飾りのないドレスに身を包んだ姉様は、掛け値なしに美しかった。

白いドレスに真っ赤な髪と瞳が映える。

リエル姉様が気にしていた傷跡もシフォンのケープや、手袋で隠せるよ、と言ったんだけど、ラグエルさんの一声で、リエル姉様はあえて傷を隠さず、額の傷だって前髪を上げて私達に見せたんだ。

「守り抜いた証だ」とラグエルさんは言った。

「守ってくれた証だから、隠す必要はないんだ」と。

ああ・・・。ラグエルさん熊の癖に分かってるなあ。でも、本人に確認してからじゃないと、ダメだよ？と言ったら、すぐ姉様に尋ねていた。

リエル、あなたはと思う？ 俺はその傷は勲章だと思うんだ。でもあなたがいやならば・・・と、おろおろしながらラグエルさんがリエル姉様の顔を覗き込んでいた。



リエル姉様が泣きながらラグエルさんの首に腕を回すのを見て、みんな、わっと盛り上がった。

リエル姉様は、ラグエルさんのために傷を隠そうと思っていたんだ。親族の男に、傷もちの娘より、うちの娘を娶ればいいものを、と言われ続けて、下を向いていたらしい。やっと吹っ切れたようで、顔を上げたリエル姉様は、それまで以上に美しかった。

それから、最後まで抵抗していた彼の髭だけど。

ご主人様が綺麗にそりあげてくれた。さすが・・・！

そして、婚礼当日。

白の山羊族特有の衣装を着たラグエルさんが待つ祭壇に歩み寄り、リエル姉様の美しさは、後々の語り草になるほどだった。

神聖で厳かな空気を盛り上げていたのが、壇上で祝福の言葉を述べる羊族の長さまだったのは、言わずもかな。

打ち合わせたとおりに式が進む。

ご主人様が厳かに  
「誓いのキスを」

と、言った。

・・・羨ましいなあ、と思ったのは、内緒だ。

．．．ちなみに、その後羊の国に戻ってから発刊された、小冊子の内容も内緒なのだ。

羊の国から、狼になりたい（後書き）

えー・・・そのものずばりの構図だと思います。

羊の国から、なつやすみ。

拝啓。

異世界にいらっしゃるお父様、お母様、いかがお過ごしですか？

こちらはとても平和です。

涼しかったあの時期はあっという間に過ぎ去りました。寒かったあのころが懐かしく感じられます。

今はもう、暑くてあつくて溶けちゃうんじゃないかと思うくらいです。現に木陰で、でろろんと伸びている子ひつじさん続出なんですよ。・・・それはそれでかわゆいんですがね。

あのデロンとしたところなんか見ていると、鼻息が荒くなって、目がかまぼこ型になってしまいますね。にやにや。

くったりした子ひつじさんを枕に、昼寝。いいですねー。暑いので嫌がられてぺしぺしされますがね。

・・・そこで毎度ご主人様に怒られますがね・・・。

熱中症が怖い今日この頃なので、子羊ちゃんたちには水分小まめに取るよう指導してます。

かつかと燃える太陽さんが恨めしいです。

でも芽衣はせっせと涼しい夏を演出しますよ！ 愚痴を言ってい

ても仕方がないもん、楽しまなきや損です。

水辺に大きな布を張って、簡易テントを何個も作りました。日陰を作って居心地よくすれば子羊ちゃんたちも喜ぶだろうと思って！瑞々しい果物も沢山冷やして、香草の青汁だって準備しました。

さらにおこちゃまには甘い飲み物。大人の皆様にはすっきりした果物ジュースに、キンキンに冷やしたお酒です。

サンドイッチも各種。つまみやすいようにピンチョスにしました。羊さんのチーズで作ったピザだって、夏ばて防止にお野菜のピクルスだって準備しました。

そしてご主人様をお願いして作ってもらったのが、川の支流をせき止めた簡易プールです！

でも完全に流れを止めたわけじゃないんでミニ自然に流れるプールです！

小さきものが流されないように人手だって募りました！ 下流でしっかりと成人牡羊の皆さんが見張ります。でもこんなに成人の牡羊さんがいたってことが驚きです。

聞けば、お屋敷とは別の屋敷で、日々毛織物の運搬や販売などの商取引を行っているそうです。

「あのね、あのねー、でいりきんしになっただんだよー」

「おささまがねー」

「きめたのー」

「じじさまもいっしょになっただねー」

「「「きんしだーって」「」」

「「「でいりきんしってなにー？」「」」

「……えーと……」

答える前に、血相変えたご主人様に搔つ攫われました。後ろで小さき者たちがメリーさんに説教受けて、さらに小さくなってました。かわいすぎる……。

……さて、万が一のために川を横切るように丈夫なロープを五本張りました。

ちいさきものたちが手をすり抜けてもどれかに引っかかるでしょう。むしろ引っかかるために大人の手をさけるでしょう。

準備はおーけーです。川流ればっちこい！

川原にこだまする子供達の歓声。楽しそうな笑い声。

万全の川遊び。でも喜んだのは小さき者だけではありませんでした。

「おお、嫁御、嫁御、お茶がなくなりそうじゃー」

「こっちに来て一緒に水浴びするかー？」

川にはまっけていたばたしてる（……としか見えない）爺婆に手招きされました。

「水着はこの間渡した奴じゃろうなー」

「おー。おささま好みのー」

自分の体の前で手でカーブを描く爺たち。……その手つき何。

「ぐふふ。あれを着た嫁御を見れば、朴念仁の長様といえど！」

「辛抱堪らん！」

爺たちが腰を前後にかくかくさせながら、叫んだ。

ほんと、無駄に元気な爺ちゃんたちだ・・・。

「・・・ところで、皆の衆、カキ氷にはイチゴミルクじゃと、わしはおもうのじゃがー」

「いやいや、香草ミルクがいちばんじゃー」

「おおお、特に嫁御特製の香草を使った香草シロップは絶品じゃの？」

さり気なさを装って話を変えた爺たちの目線の先で、ご主人様が無言の威圧感を出していました。・・・ご主人様、凍ります・・・。

・・・でもまあ、良いか。夏だし。

今日は一日ここで、羊族総出で遊ぶのです！

だから遥かなる異世界にいらっしゃるお父様、お母様、

大丈夫。芽衣は、元気です。

\*\*\*\*\*

水しぶきがあがるたび、小さきものの歓声と、芽衣の笑う声が聞こえる。

羊族の上位種ノルディは、水着をつけた芽衣の姿に釘付けだった。掴んだタオルもそのままに、呆然と見つめるその先で。

・・・芽衣の小ぶりの形良い乳が濡れていた。

ぴたりと張り付いた布が、芽衣の綺麗な形を浮かび上がらせてい

る。・・・それは先端の甘いつぼみも。

小さな尻が申し訳程度の布に隠されて、でも腿の間の柔らかい部分がふつくと盛り上がっているのを見て、大判のタオルを手に駆け出そうとしたノルデイさんだったが、楽しそうな笑顔に声をかけるタイミングを逃してしまった。

体のラインはまったくと言っていいほど隠されていないが、全裸よりはマシ。男の劣情かき立てるが、全裸よりはマシ。

・・・だが、この姿を見ているのが自分ひとりじゃ無いことが、こんなにも悔しくて、常なら隔離されているはずの牡羊達の目玉を潰して回りたい、とぐるぐる唸るノルデイさんだった。

だいたい。

川遊びなら私や既婚者だけでも良いだろうに、いつの間にか組み込まれていた成人牡羊の群れ。メリーやリリアナの懇願に押されたが、呼ぶのならなぜ恥らって隠れているのだ、さつさと目当ての男を釘付けにしておかないか！

私の芽衣が万が一にも目を奪われでもしたら、どうするのだ！

芽衣の柔らかな黒髪が濡れた肌に張り付いて、稜線を美しく演出している。すらり伸びた太腿の艶やかさに、目の前がちかちかした。さわり心地の良さそうな胸から腰、腰から太腿と目をやって、際どいところに刻み付けた赤い花を認めて安心する。

タベ、きつく吸い上げておいてよかった。

胸元と右わき腹と太腿の内側。



特に両胸のあわせの内側、見えるか見えないかと言つぎりぎりのところ。普通なら見えないそこは、上から胸の谷間を覗かなければ見えない場所だ。現に成人した独身男子が覗き込んで跡をみつけ、私を見て青くなっていた。

その目線にふつと余裕の笑みを帰す。くくく実質余裕なんか無いに等しいがな！そこは男の意地と言うものだ。

「きゃっ！ やつたなあ〜！」

小さきものが芽衣に向かって水をかけたようだ。ばしゃばしゃと水音、楽しそうな声が響いた。

芽衣も笑いながら応戦している。大きく開いた足の間の水を手のひらで掬っては投げかけていた。

・・・その右太腿の際どいところに、赤く咲いた花。

芽衣を目で追っていた男の顔が、さっと色をなくした。

・・・それでいい。

あの娘は、私のものだ。

\*\*\*\*\*

「・・・百物語？」

白銀の麗しの長様が小首をかしげた。

「はい！ 怖い話を順番に話していくんです。ここにいる人数分なので厳密には百物語にならないんですがね。話し終わったら持つてるろうそくの火を吹き消すんです」

ふーってね！

「・・・なるほど。徐々に明かりが減って恐ろしさも増すと言っ訳ですね・・・」

「はい！ 意中の人の隣にすわると良いですよ！ 怖がってぎゅうぎゅう抱きついてくれますからね！」

「・・・では、私は芽衣の隣に座ろう」

「は？」

何か言い返す前に、ご主人様の隣に座られました。・・・え、でもここを狙ってる人は沢山いるんですよ？

お尻がうずうずと居たたまれなさにうずきます。良いのかな、ここにいて。

恐る恐る顔を上げると、となりに座るご主人様が満足そうに笑った。

・・・ほっとした気分になった。

「では、皆準備はいいか？・・・はじめろぞ」

厳かにご主人様の声が響いて、各々のろうそくの火が灯された。

\*\*\*\*\*

「・・・後ろを振り向いた時・・・そこには血まみれの羊の姿が・・・」

「ひイ！」「ひよえ！」「ひやあ！」

小さきものを筆頭に、羊族の俊英たちが情けない声を上げた。牡羊の名誉のためにいうが、何かを決意した娘羊に抱きつかれて驚いたのだろう。現にメリーの隣の男は、顔を真っ赤にしてわたわたりてる。

リリアナの隣の男は奇妙なまでに固まっていた。

「かたかたかたとなる音に慌てて顔を上げたら、窓の外に無数の人形の首が・・・！」

「ひう！」「ひいいい！」「ひよわあ！」

小さきものにいたっては、頭かくして尻隠さず。積み上げたクツシヨンの山に頭を突っ込んでプルプルしている。尻が震えているのを見ても、なんの感慨も浮かばないが、芽衣が見れば、きつというもののように鼻息荒く子羊の尻を追いかけるのだろう（いやな表現だな）。だが、芽衣は今はそのところではないようだ。

・・・ふ。

「水のそこから、今も聞こえるそうです。・・・おいでえ・・・おいでえ・・・と」

「はう！」

・・・ふふ。

「走っても走っても耳元で叫ぶんだってえ、かえせええって！」

「ひ、う！」

がたがたと震えながら私の腕に縋りつき、私を盾に隠れているつもりなのだろう、芽衣の姿を目にすれば、どんな媚態も敵わない。

かくかくかくと震え慄く君の姿はなんと云うか、・・・かわいらしいにも程がある。

ほら、今また吹き消されたろうそくの炎に、うろうつと動く、黒い瞳。

まさかと思うが、お化けとやらを探しているの？

君の一番近いところに私がいて、そんな居るか居ないか判らない代物を傍に寄せ付けると思っている？

ありえないだろう。

だから意地悪したくなるんだ。

「・・・芽衣。ほら皆話し終ったよ、キミの番だ」

「・・・ひい。・・・わ、わたし、です、か・・・？」

ふふふ。腰が抜けそうな頼りない顔で見上げてきた芽衣の可愛らしさは、筆舌に尽くしがたい。

このまま芽衣を抱き上げて部屋にこもり、朝まで鳴かせたくなる

ほどに。

芽衣の柔らかいところを暴いて、噛り付いて、嚼り上げて、全部味わってえぐり立てて、一番奥で果てたい。

肌の上にシルシをつけるだけじゃ、足りないんだ。

芽衣の中に刻み付けたい。

深く繋がって、離れられないほど近くにいたい。ニガサナイ。

「あ、じゃ、さ、ささ、最後によ、おはなし、です」

ひしつとわたしの腕にしがみ付いたまま、芽衣が話し始めた。

\*\*\*\*\*

「・・・で、慌てた少年が村に帰ってみんなに言いました。

狼が来たぞーッ！って・・・でも、さんざん嘘をついていた少年の言葉を誰も信じてくれなくて。

やがてやって来た狼の群れに、村人達はみんな食べられてしまったという事です・・・。

おしまい！」

わたしは、ふーっとろうそくの火を吹き消した。

みんなの怖い話が本当に怖すぎて、これ以上は泣いてしまいそうだったから、御伽噺で場をにごそうと思った。

「あれ？」

話し終わったのに、みんな微動だにしない。

「……ごしゅじんさま……？ みんな……？」

顔を上げてノルディ様を見た。それから、みんなも。

「……え」

……みんな、白目を剥いて気絶していた。

羊の国から、なつやすみ。（後書き）

美形の白目・・・（遠い目）

かくぶるしながら皆魔されたのでしょうか。

「おおかみ・・・」

「おおかみがきた・・・」

「おおかみが・・・」

「うわあああああんんん、もつつそつかないiiiiiiiiiiii」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7278o/>

---

羊の世界にとりっぷ！

2011年8月11日20時51分発行